総社桜ケ丘遺跡

1985

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財調査団

序

前橋の地は、赤城山、榛名山を後背として関東平野の北西部に位置し、利根川が北から南東にぬけて貫流しており、四季おりおり山の姿が変化し風光明媚な地です。

前橋市域には、700余基もの古墳があり、この地が古代東国文化の中心地として繁栄したことを物語っている。

こうしたすぐれた古墳文化を基盤として律令体制の中にあっては、元総社の地が国府の所在地となり山王廃寺、国分寺等が建立され上野国の政治の中心地となり仏教文化の華が咲きほこった。

特に、本地域の周囲において国史跡の宝塔山古墳、蛇穴山古墳、総社二子山古墳、吉岡村の南下古墳群に近く古代から近・現代までの歴史的遺構が群在している。

このたびこのような歴史的環境のほぼ中間点に近い総社町桜ケ丘の地に民間宅地開発分譲計画に伴い種々の協議・調整の結果発掘調査を実施することになったものである。

調査の結果、学術的にも貴重な二ツ岳墳出のＦＡ層を切りこんだ住居跡を初め畑跡等が発見されている。このことは、物心両面からの援助、協力をいただいた㈱コイデ玩具に厚くお礼を申し上げます。

また、山武考古学研究所をはじめ御指導、御協力いただいた関係者、作業員の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

本報告書が斯学の発展のため少しでも寄与できれば幸いと存じます。

昭和60年３月１日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団　長　　奈　良　三　郎

例　言

1．本書は前橋市総社町桜ケ丘の宅地造成計画に伴う事前発掘調査の報告書である。

2．発掘は前橋市教育委員会指導のもと山武考古学研究所が担当し、現地調査は同研究所職員折原洋一が行なった。

3．遺跡の所在地及び調査期間は下記の通りである。

所在地　　群馬県前橋市総社町桜ケ丘1037他

調査期間　昭和60年６月４日～７月12日

4．本書の遺物・図面の整理は折原洋一が担当し、平山史子、片岡美枝子、根本時子に協力を得た。本書の執筆は第１章を福田紀雄が、他を折原洋一が行なった。

5．本書の編集は折原洋一が行ない平岡和夫が総括した。

6．発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の機関、諸氏の御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第であります。

群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、㈱小出玩具、前橋市宅地開発事前協議会

7．発掘調査参加者（敬称略アイウエオ順）

原沢らく　岡田カツ子　小野里良子　小柴マツ子　佐藤ハル　新保一美　須藤マツ江

住谷文彦　千明香根子　福室良子　　水野キクエ　森田久子

凡　例

1．本遺跡は前橋市教育委員会遺跡略称のＡ５である。

2．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

全体図1/400　住居跡・土坑1/60　溝1/160　土器1/3　石器1/3　石器の一部　古銭1/2

3．スクリントーンは次の通りである。

遺物　　黒色処理　灰釉　スス付着

遺構　　焼土　ＦＡ層

目　次

第１章　調査に至る経過……1
第２章　位置と環境……2
　第１節　自然環境……2
　第２節　歴史環境……2
第３章　調査の方法……5
　第１節　調査の方法……5
　第２節　標準土層……5
　第３節　調査日誌……5
第４章　遺構・遺物……7
　第１節　遺構の概観……7
　第２節　住居址……8
　第３節　土坑……39
　第４節　溝……39
　第５節　畝状遺構……41
　第６節　調査区内の遺物……41
第５章　まとめ……42

挿図目次

第１図　桜ケ丘遺跡とその周辺　3
第２図　桜ケ丘遺跡位置図　4
第３図　標準土層図　5
第４図　遺跡全体図　7
第５図　１号住居址実測図　9
第６図　１号住居址出土遺物実測図・拓図(1)　10
第７図　１号住居址出土遺物実測図(2)　11
第８図　１号住居址出土遺物実測図(3)　12
第９図　１号住居址出土遺物実測図(4)　13
第10図　２号住居址実測図　15
第11図　２号住居址出土遺物実測図・拓図　15
第12図　３号住居址実測図　16
第13図　４号新住居址実測図　17
第14図　４号新住居址出土遺物実測図・拓図　18
第15図　４号古住居址実測図　19
第16図　４号古住居址出土遺物実測図・拓図　19
第17図　５号住居址実測図　20
第18図　５号住居址出土遺物実測図・拓図(1)　21
第19図　５号住居址出土遺物実測図(2)　22
第20図　６号新住居址実測図　23
第21図　６号新住居址出土遺物実測図・拓図　25
第22図　６号古住居址実測図　26
第23図　６号古住居址出土遺物実測図・拓図(1)　27
第24図　６号古住居址出土遺物実測図(2)　28
第25図　７号住居址実測図　29
第26図　７号住居址カマド実測図　30
第27図　７号住居址出土遺物実測図・拓図(1)　31
第28図　７号住居址出土遺物実測図(2)　32
第29図　８号住居址実測図　33
第30図　８号住居址出土遺物実測図・拓図　33
第31図　９号住居址実測図　34
第32図　９号住居址出土遺物実測図　34
第33図　10号住居址実測図　35
第34図　10号住居址出土遺物実測図・拓図　37
第35図　11号住居址実測図　38
第36図　12号住居址断面図　38
第37図　３号土坑実測図　39
第38図　１・２号溝、畝状遺構実測図　40
第39図　溝出土遺物実測図・拓図　41
第40図　調査区内出土遺物　41

表目次

表1　1号住居址出土遺物(1)……10
表2　1号住居址出土遺物(2)……13
表3　2号住居址出土遺物……14
表4　4号新住居址出土遺物……18
表5　4号古住居址出土遺物……18
表6　5号住居址出土遺物(1)……21
表7　5号住居址出土遺物(2)……22
表8　6号新住居址出土遺物……24
表9　6号古住居址出土遺物……28
表10　7号住居址出土遺物……30
表11　8号住居址出土遺物……33
表12　9号住居址出土遺物……35
表13　10号住居址出土遺物……36

図版目次

図版１－１　発掘終了状況
　　－２　１号住居址完掘状況
図版２－１　１号住居址カマド遺物出土状況
　　－２　１号住居址カマド完掘状況
図版３－１　２号住居址完掘状況
　　－２　２号住居址カマド
図版４－１　３号住居址完掘状況
　　－２　３号住居址カマド
図版５－１　４号新住居址完掘状況
　　－２　４号古住居址完掘状況
図版６－１　４号古住居址カマド完掘状況
　　－２　５号住居址完掘状況
図版７－１　５号住居址カマド
　　－２　６号新住居址完掘状況
図版８－１　６号新住居址新カマド
　　－２　６号新住居址古カマド
図版９－１　６号古住居址完掘状況
　　－２　６号古住居址カマド完掘状況
図版10－１　７号住居址完掘状況
　　－２　７号住居址カマド
図版11－１　８号住居址完掘状況
　　－２　８号住居址カマド
図版12－１　９号住居址完掘状況
　　－２　10号住居址完掘状況
図版13－１　10号住居址カマド完掘状況
　　－２　11号住居址
図版14－１　12号住居址
　　－２　３号土坑
図版15－１　１号溝
　　－２　２号溝
図版16　１・２号住居址土器
図版17　４号新・古住居址、５号住居址
　　６号新住居址土器
図版18　６号古住居址・７号住居址土器
図版19　９・10号住居址土器
図版20　石製品・鉄器

第１章　調査に至る経過

58. 12. 27　㈱コイデより前橋市総社町桜ケ丘1037地（2.959㎡）で宅地造成計画書ば提出される。前橋市宅地開発事前協議会より意見書の提出方の依頼がある。

59. 1. 5　現地、表面調査、地形調査、実施する。

59. 1. 12　現地調査により土師器の散布、周囲の歴史的環境等により遺跡地の可能性大である。開発に先だち発掘調査が必要であると回答する。（土地所有者及び建築指導課）

59. 1～2　埋蔵文化財の取り扱いについて、土地所有者、代理人、前橋市教育委員会と協議する。

59. 2. 14　土地所有者、代理人、前橋市教育委員会と協議、調整をする。

その結果、市文化財保護係専門職員立ち会いのもとで試掘調査を実施することで合意する。

費用負担、重機、作業員の手配については原因者が責任をもつ。

59. 2. 16　試掘調査依頼申請が提出される。

59. 2. 19　試掘調査予定日であったが降雪のため後日延期とし、調査日を再度協議する。２月25日とする。

59. 2. 25　開発予定地内に巾１ｍ、長さ10ｍのトレンチを８ケ所設定し試掘調査を実施する。開発予定地の東側の部分から平安時代の住居跡、カマド等が発見される。

西側の部分は、工場造成時（昭和30年代）に削平されており数cmでローム面になり遺構は確認されなかった。

59. 3. 6　宅地開発前に発掘調査を実施する事の回答する。

59. 4～5　調査主体者、調査期日等について協議する。

59. 6. 2　埋蔵文化財発掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出される。

（調査主体者を前橋市埋蔵文化発掘調査団とする）

（福田）

第２章　位置と環境

第１節　自然環境

本遺跡は国鉄総社駅より北へ1.5km程度行った総社町桜ケ丘1037に所在する。総社町周辺は利根川西岸の榛名山東麓から前橋台地への移行部にあったており、台地状を成している。この台地を午王頭川、八幡川などの中小河川が東南方向に流れ、台地を細長く分断している。これらの河川の内、午王頭川は榛名山東麓に源を発し、東南方向に流路を取り、下流部では利根川に流れ込んでいる。本遺跡はこの午王頭川下流と利根川に狭まれた舌状台地上に位置する。この舌状台地は高燥な土地で、かつては桑畑となっていた。

調査区は利根川に面した舌状台地の東部で、利根川まで約150ｍの距離にある。また、調査区内はほぼ平坦であるが、わずかに東へ向ってゆるやかな傾斜をもっている。なお、調査区の北方はゴルフ練習場がかつて存在したため、現状では大きく削平を受けており、地表にＦＡ層が露出している。削平以前はさらに高くなっていたと考えられ、調査区内も旧地形ではもう少し傾斜のあった斜面だったと思われる。

第２節　歴史環境

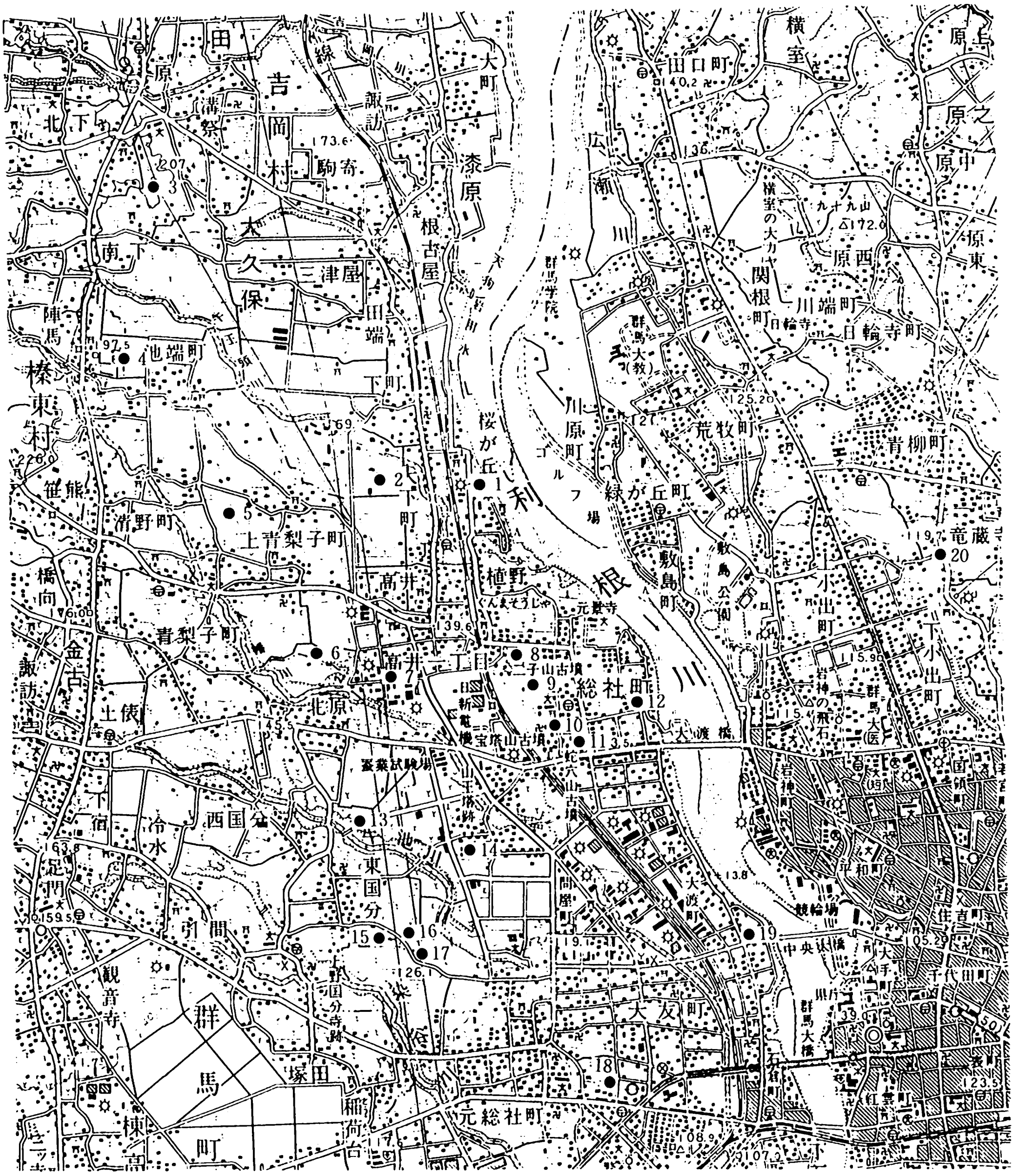
本遺跡周辺には縄文時代から平安時代にかけての多数の遺跡が存在する。また、これらの遺跡は集落跡から上毛野国衙、あるいは県内有数の古墳群というように多種多様に亙っている。

縄文時代では、下東西、清里陣場、庚塚、国分境の各遺跡で若干の遺物が出土しており、時期的には前期～後期に想当する。また、国分寺中間地域遺跡において前期の住居址１軒、中期の住居址20軒が検出されている。

弥生時代では清里・陣場遺跡で環濠集落跡が、国分寺中間地域遺跡で方形周溝墓が、下東西遺跡で住居址が検出されている。また、本発掘調査区南方の同一台地上においても後期に属する住居址が調査されている。

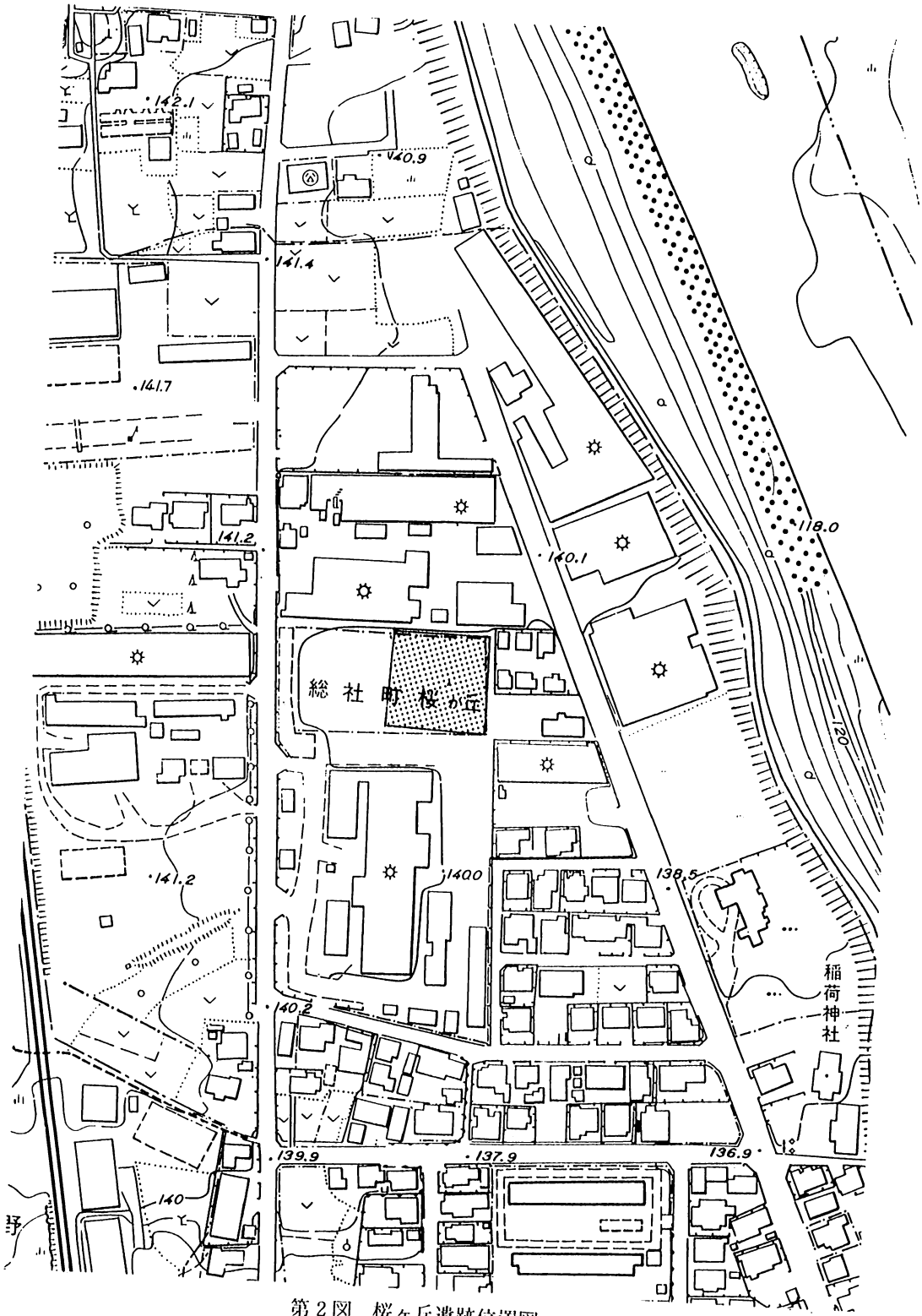
古墳時代には県内でも有数な古墳群である総社古墳群が存在する。総社古墳群は本遺跡と午王頭川の谷を狭み対岸に存在し、二子山古墳をはじめとして終末期の古墳である宝塔山古墳や初現期の横穴石室をもつ王山古墳がある。午王頭川上流には南下古墳群が存在する。

奈良・平安時代になると本遺跡の南方の総社町を中心として大きく発展し、上毛野国の中枢機関である上毛野国府跡、上毛野国分僧寺跡、上毛野国分尼寺跡、山王廃寺跡が出現する。これにともなって周辺に大規模な集落跡が出現する。調査された遺跡として、下東西、国分寺中間地域、柿木、国分境、青柳寄居遺跡などがある。また、午王頭川の上流には本遺跡とほぼ同時期の集落跡である清里・陣場遺跡が存在している。



1 桜が丘遺跡　2 長久保遺跡　3 南下古墳群　4 清里陣場遺跡
5 庚塚遺跡　6 下東西遺跡　7 柿木遺跡　8 二子山遺跡　9 愛宕古墳
10宝塔山古墳　11蛇穴山古墳　12遠見山古墳　13国分境遺跡
14山王廃寺跡　15国分僧寺跡　16国分寺中間地域遺跡　17国分尼寺
18上毛野国府　19王山古墳　20青柳寄居遺跡

第１図　桜ヶ丘遺跡とその周辺



第2図　桜ヶ丘遺跡位置図

第３章　調査の経過

第１節　調査の方法

本調査は前橋市教育委員会によって行なわれた試掘調査に基づき発掘範囲を決定した。発掘範囲は造成地域の東部、約1,000㎡を対象とした。

発掘調査を行なうにあたって、調査区全域に10ｍ四方のグリッドで割り付け区分した。グリッドの呼称方法は東西方向を北端よりアルファベットでａ・ｂ……、南北方向を東端より算用数字で１・２……とし、各グリッドの東北の交点を基点とした。

住居跡の調査は覆土に十字のセクションを設けて土層観察を行なうようにした。出土遺物は極力その分布状況を記録するようにしたが、10号住居址は調査期間終了間際のため、覆土中の遺物は一括して取り上げざる得なかった。図面は遺構平面図を1/20、カマド平面図を1/10、全体図を1/200とした。

第２節　標準土層

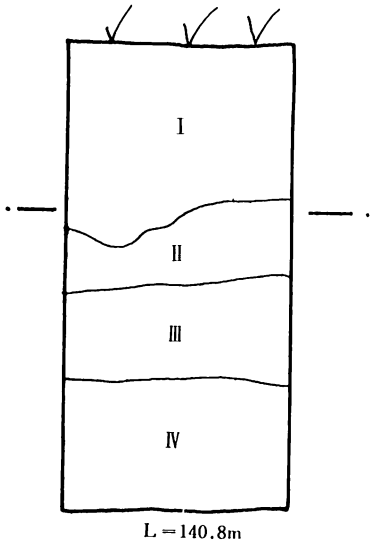
本遺跡では第Ⅰ層から第Ⅳ層までの標準土層を確認した。各層は次の通りである。

第Ⅰ層　暗褐色土。粘性、締りともに悪い。

第Ⅱ層　黄褐色のＦＡ層。

第Ⅲ層　黒色土。白色の軽石（φ２～５㎜）を多量に含む。粘性はたいへん不良で、締りは良好である。

第Ⅳ層　黒褐色土。φ１㎜以下の白色粒を多く含む。粘性、締りともに良好である。



第３図　標準土層図

第３節　調査日誌より

本遺跡は昭和59年６月４日から７月12日までの期間調査を行なった。

６月４日　機材の導入および現地で、発掘調査の打ち合せ。

５日　現場事務所の整理を行なう。

６日　表土除去を開始。ＦＡ層上面を確認面とする。遺構確認開始。

7日　表土除去作業および遺構確認を継続する。住居址のプランを検出。

8日　表土除去作業および遺構確認。

9日　表土除去作業終了。

11日　遺構確認作業終了。

12日　遺構確認状況の全景写真を撮影。グリッド・ポイントの設定開始。1号住居址調査開始。

13日　グリッド・ポイント設定終了。

14日　2号、3号住居址調査開始。

15日　4号新住居址調査開始。1号住居址セクション図作成。

16日　2号、3号住居址掘り下げ終了。

18日　1号住居址遺物出土状況写真撮影。5号、7号、6号新住居址調査開始。

19日　2号、3号住居址遺物出土状況実測。

20日　2号溝調査開始。3号住居址完掘状況写真撮影。

21日　雨のため室内整理。

22日　雨のため室内整理。

23日　雨のため室内整理。

25日　1号住遺物取り上げを行なう。平面図作成。

26日　4号新居址遺物取り上げ、平面図実測。

27日　5号住居址調査開始。

28日　4号古住居址、6号古住居址調査開始。

29日　4号古住居址平面図作成。

30日　6号古住居址遺物取り上げを行なう。

7月2日　畝状遺構調査開始。

3日　8号住居址調査開始。5号住居址調査終了。

4日　畝状遺構調査終了。

5日　8号住居址調査終了。

6日　11号、12号住居址調査開始。

7日　9号住居址調査終了。

9日　1号溝調査開始。7号住居址調査終了。

10日　1号溝調査終了。

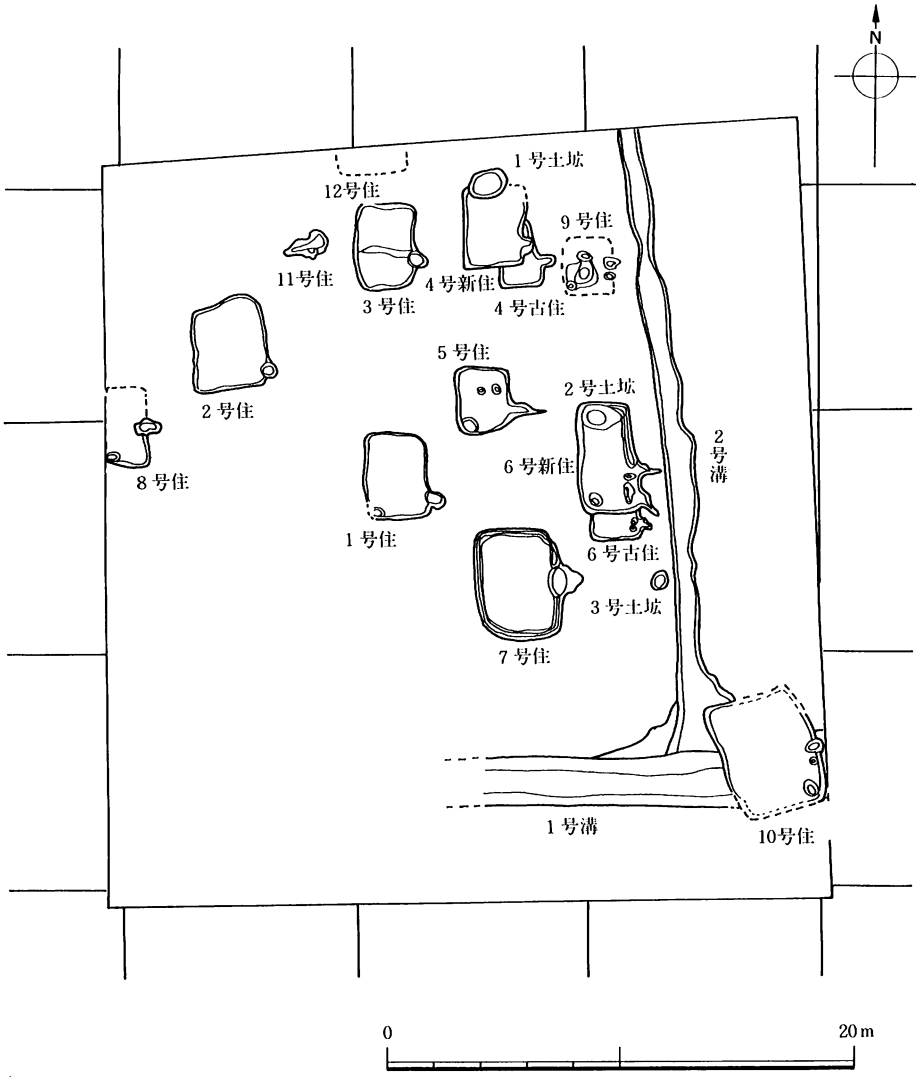
11日　10号住居址平面図作成、完掘状況写真撮影。

12日　全体図作成。本日をもって調査終了する。

第４章　遺構・遺物

第１節　遺構の概観

本調査において確認された遺構は平安時代の住居址14軒、土坑３基、中世以後の溝２条、近世以後の畝状遺構１である。確認面は全てＦＡ（標準土層第Ⅱ層）である。遺構・遺物ともに調査区の北東部に集中しており、南西には無い。また、調査区の周囲には著しく攪乱が見られており、調査した住居址の中にも削平を受けているものが確認できた。特に調査区の東辺と北辺が著しく、消失している遺構も存在したと思われる。



第４図　遺跡全体図

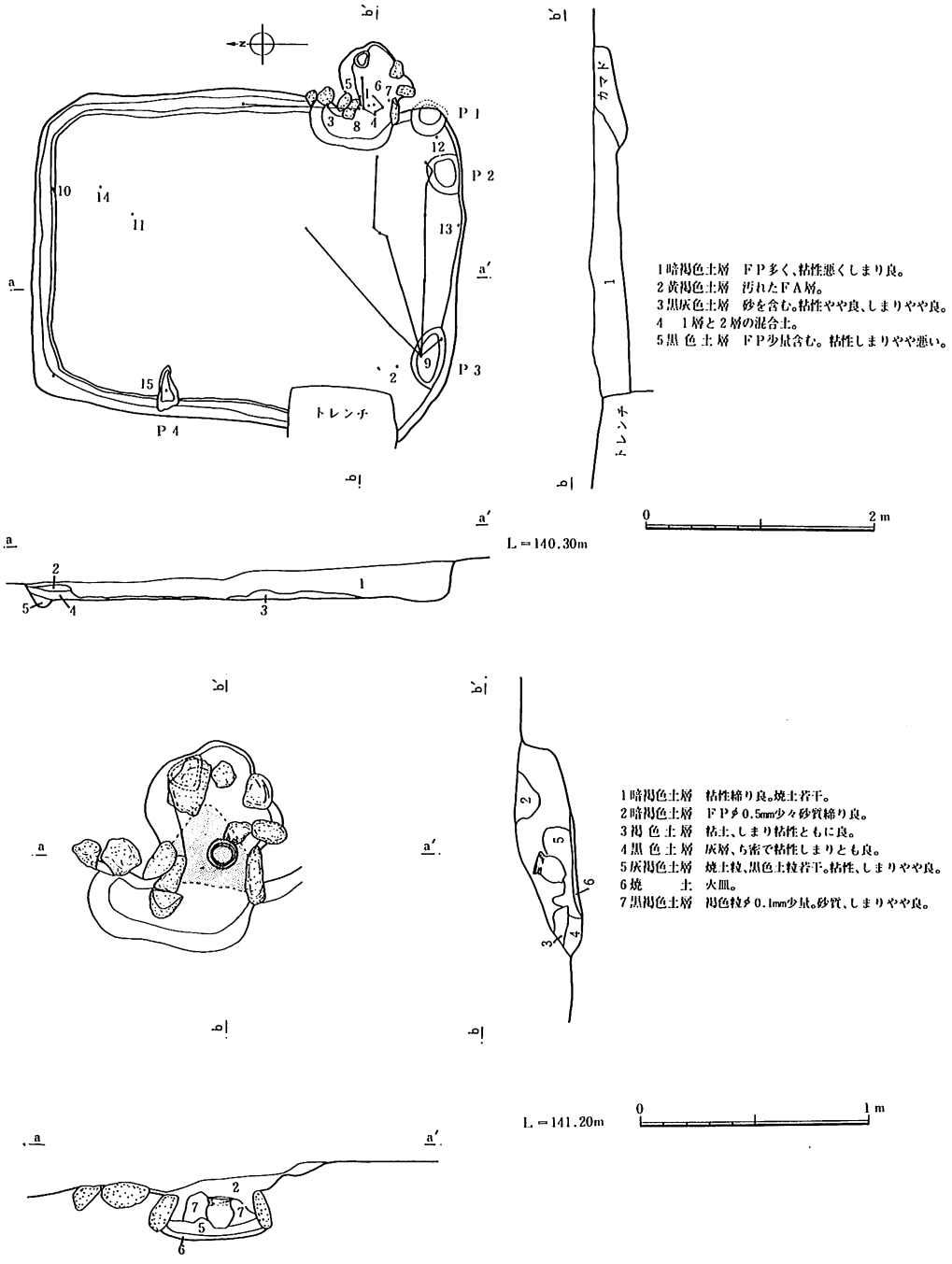
第２節　住居址

１号住居址（第５図、図版１－２、２－１・２）

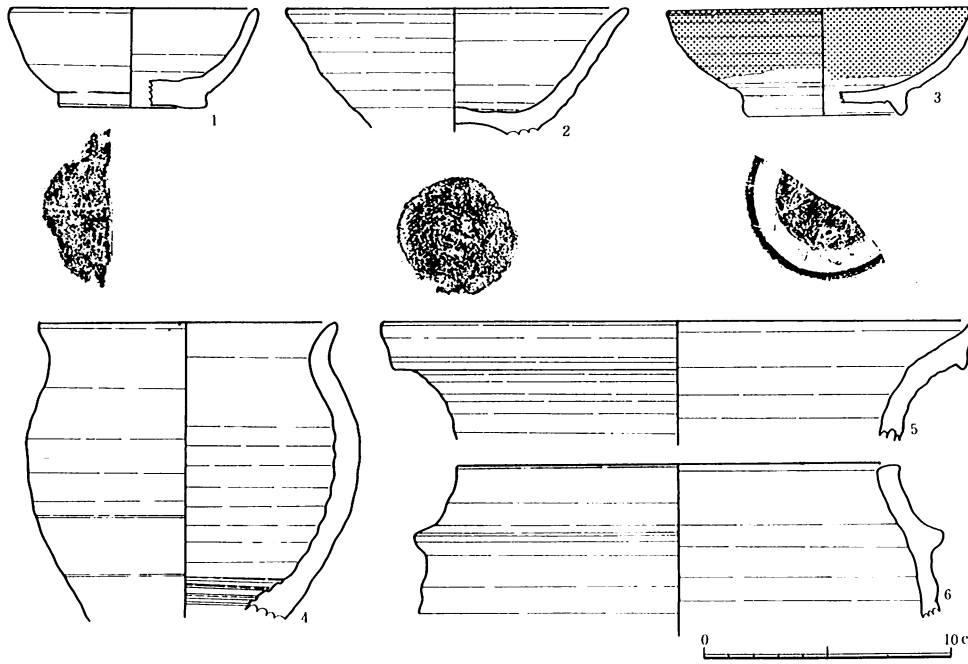
本住居跡は調査区中央部のｂ－２区に位置し、約２ｍ北東に５号住居址が、約２ｍ南東に７号住居址がそれぞれ存在する。本住居址はすでに試掘調査段階でその存在が予想されており、発掘調査の端緒となった住居址である。なお、試掘トレンチにより住居址西壁と床面の一部が削平されている。確認面は標準土層第Ⅱ層である。平面形を南北3.7ｍ、東西2.9ｍの南北に長い、長方形を呈し、主軸方向はＮ－90°－Ｅ、コーナーは隅丸である。壁は南壁が他の壁よりも残りが良く、確認面までの高さが約35㎝を測り、ほぼ直立して立ち上がる。床面は標準土層第Ⅲ層を掘り込んだままで、貼床は認められない。また、床面の硬度は全体的にやや軟弱と言える。周溝は南壁を除き、他の３壁に巡っており、断面の形態は幅15㎝、深さ約５㎝程度のＵ字形を呈す。貯蔵穴状の土坑は南壁に接して P_1～P_3 が検出されている。P_1 は南東コーナーに存在する。形態は径30㎝の円形を呈し、床面より深さ18㎝、壁面の東部はオーバハングとなる。P_2 は南壁東部に位置し、P_1 との距離15㎝程度である。形態は径30㎝の円形を呈し、深さ18㎝程度である。P_3 は南壁西部に位置する。形態は長径55㎝、短径30㎝の楕円形を呈し、深さ12㎝程度の皿状を呈す。この他の土坑として、西壁に接して P_5 が検出されている。形態は長径35㎝、短径18㎝の三角形を呈し、深さ15㎝程度である。

カマドは東壁南部に付設されており、石組みにより構築されている。構築材は河原石を主体とし、一部に榛名山噴出の浮石安山岩を使用している。これらの構築材はカマド覆土、およびカマド周辺より比較的多く出土していることから、カマドの壁体および天井は全て石材で構築されていたと考えられる。堀方は壁外に幅45㎝、長さ70㎝に掘り込んでいる。焚口部は内法が30㎝、前面には長径70㎝、短径25㎝、深さ４㎝の浅い土坑がある。燃焼部はやや傾斜をもち、焼土化しており、中央部に支脚代用の須恵器甕が出土している。煙道部は燃焼部よりゆるやかな傾斜もって立ち上がるが、先端が急傾斜となっている。

遺物は覆土および床面から多数出土している。特に土器類はカマドから住居址南部にかけて集中していり、石製品と石材は住居址北東の覆土に集中する。１・４～８はカマド内より出土している。２は床面より正立して出土している。３はカマド内および周溝内より出土しており、さらに６号新住居址の覆土の灰釉陶器片１点と接合してしる。９は P_3 の覆土から床面上にかけて多くの破片が集中したが、この東方の覆土中の破片とも接合している。10は周溝覆土の床面とほぼレベルより出土している。11はほぼ床面より出土し、12は床面より出土し、P_1 の上部を覆っている。13はほぼ床面より出土している。14は若干床面より浮く状態で出土している。15は P_4 覆土上面より出土している。



第５図　１号住居址実測図

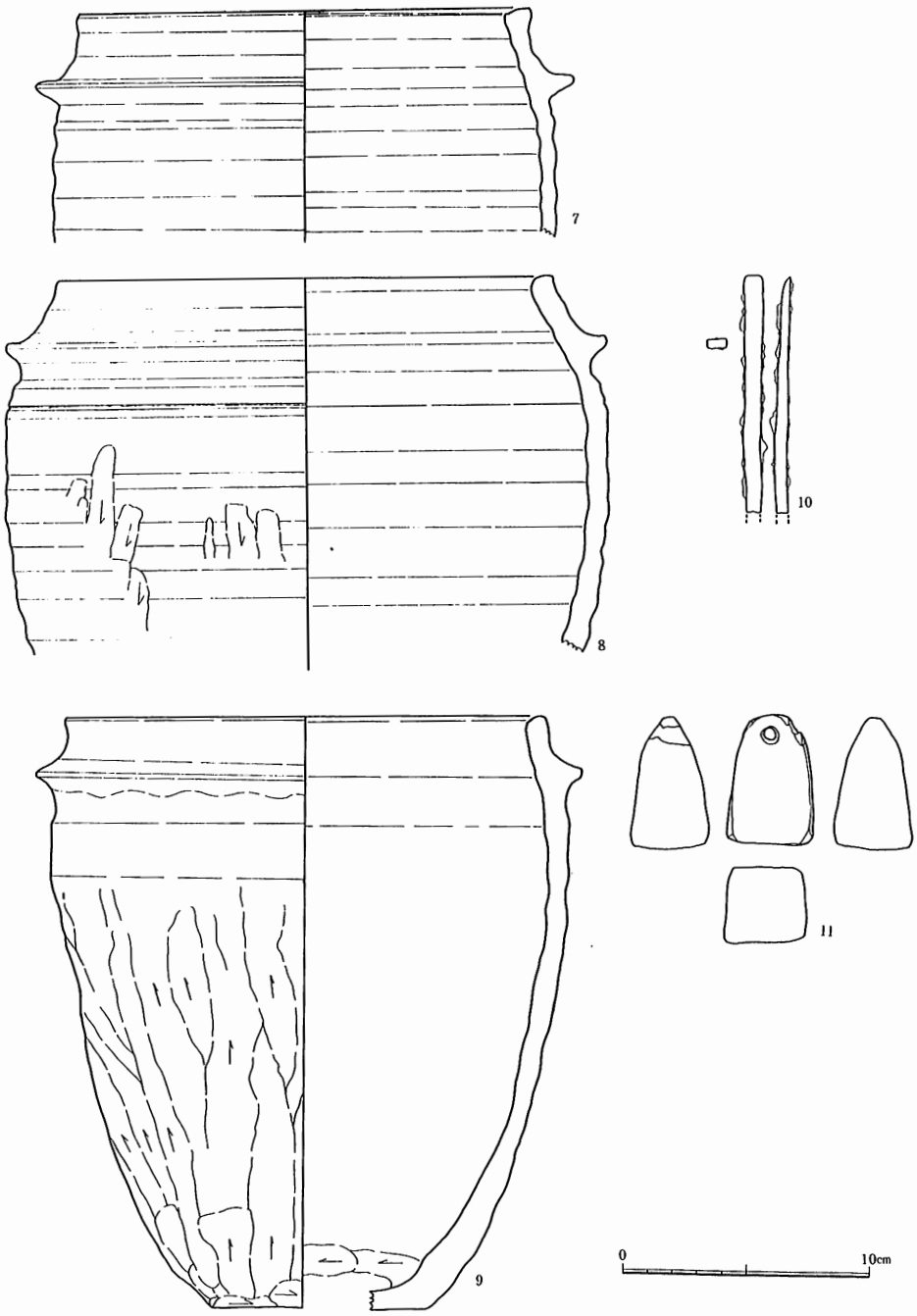


第６図　１号住居址出土遺物実測図・拓図（１）

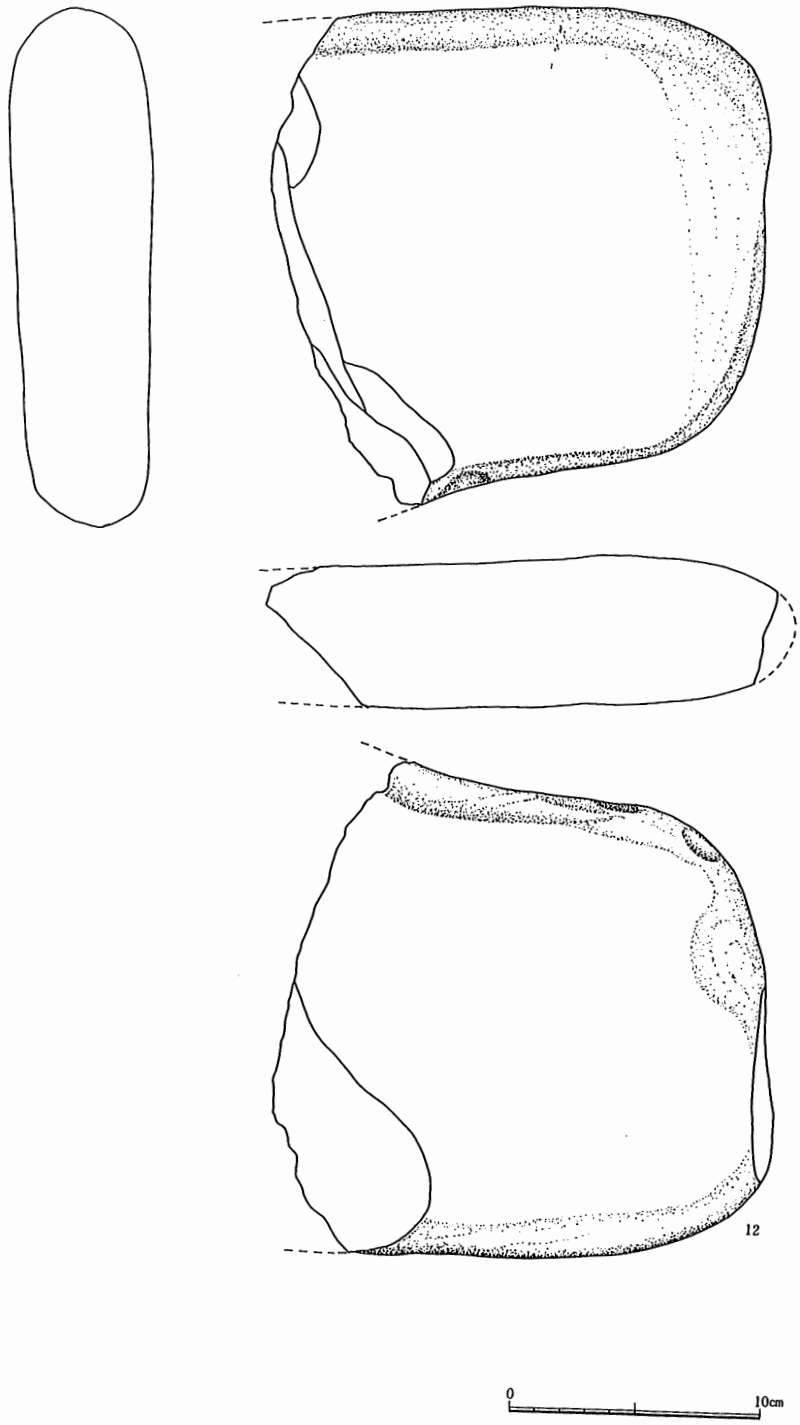
表１　　１号住居址出土遺物(1)（第６・７図，図版16）

（単位cm）

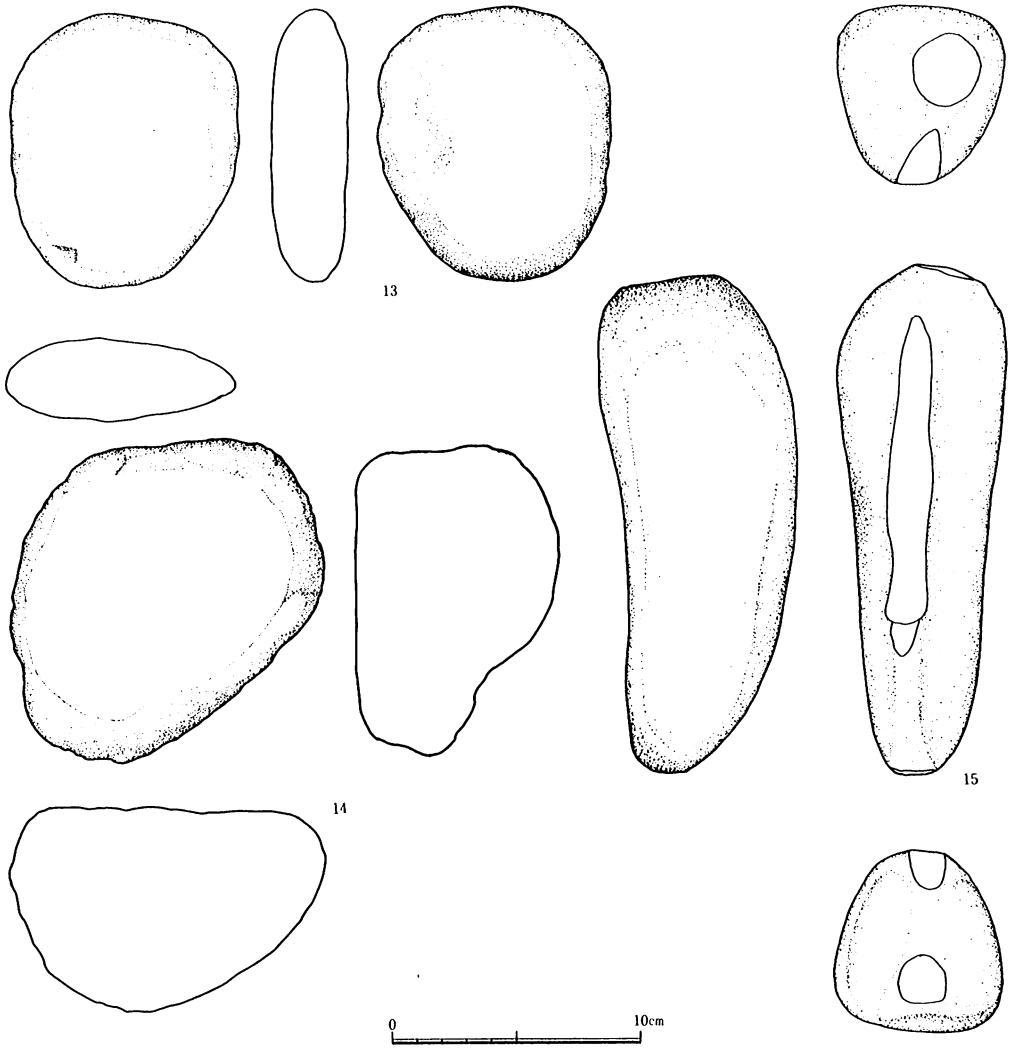
番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	土師器 坏	10.0 4.1 6.0	突出した底部。体部に若干の段。	底部糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①内外面とも赤褐色②やや不良③¼④砂質⑤器面が荒れている。
2	土師器 椀	14.0 —— ——	高台付。口唇部外反。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①内外面とも褐色②良好③高台部欠損④礫を少し含む⑤内外面にスス付着
3	灰　釉 椀	12.8 4.4 6.2	高台部端に丸味をもつ。口唇部心持外反。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。付高台。	ロクロ整形。	①内外面とも灰白色②良好③⅓④密⑤つけ釉
4	須恵器 甕	12.1 —— ——	口縁部ゆるやかに外反。	右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①内外面とも灰白色②外面酸化内面環元③底部欠損④密
5	須恵器 甕	—— ——	口唇部下端三角に突出。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①内外面とも赤褐色②酸化③口縁部⅙④礫多い。
6	羽　釜	18.0 —— ——	口縁部内湾。鍔は短かく丸味をもつ。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①内外面ともに明赤褐色②酸化③口縁部½④礫多し
7	羽　釜	18.6	内湾する口縁部。やや上向きの鍔。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①内外面とも暗褐色②酸化③口縁部⅙④礫多し⑤スス付着



第７図　１号住居址出土遺物実測図（２）



第８図　１号住居址出土遺物実測図（３）



第９図　１号住居址出土遺物実測図（４）

表２　　１号住居址出土遺物(2)（第７・８・９図、図版16・20）

（単位cm）

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎⑤備考
8	羽　釜	20.2 —— ——	口唇部やや丸い。やや上向きの鍔	右回転ロクロ整形後、上から下への削り。	右回転ロクロ整形。	①内外面とも明赤褐色②酸化③口縁部⅙④礫多し
9	土師器 羽　釜	19.8 24.4 8.9	口縁部直立気味、口唇部丸い。三角形の鍔。	口縁部横撫で後、下から上への削り。底部削り。	口縁部横撫で。胴部撫で。	①内面黒褐色、外面暗褐色②酸化③胴上部¼欠損④礫多し⑤粘土紐づくり、スス付着
10	鉄　器	細い鑿状工具である。幅８㎜、厚さ４㎜の長方形の断面をもち、丸い切刃である。				
11	砥　石	小形の砥石で、基部に小孔をもつ。通常の砥石を半分に折り、再利用している。				
13	台　石　？	表裏両面ともに磨滅しており、やや光沢をもつ。				
14	台　石　？	表裏両面ともに磨滅しており、光沢をもつ。				
15	磨　石	表面の平担面が良く磨滅している。				
16	叩　石	上下両端および背面に打痕をもつ。				

2号住居址（第10図、図版３－１・２）

本住居址は調査西北部のａ－３区に位置し、北東へ２ｍに11号住居址、南西へ２ｍに８号住居址がそれぞれ存在する。確認面は標準土層第Ⅱ層で、住居址北西部は削平を受けており、標準土層第Ⅲ層となっている。平面形は南北4.1ｍ、東西3.3ｍのやや不整な台形を呈し、主軸方向はＮ－83°－Ｅである。壁は全体的に削平を受けており、確認面より最大10cm程度である。床面は標準土層第Ⅳ層下部から第Ⅴ層上面にかけて構築されており、部分的にＦＡ層（標準土層第Ⅲ層）が敷きつめられたような状況が認められる。また、住居址東北部の床面上には焼土の堆積が部分的に検出されている。床面の硬度は全体的に軟弱である。周溝・柱穴等は存在しなかった。

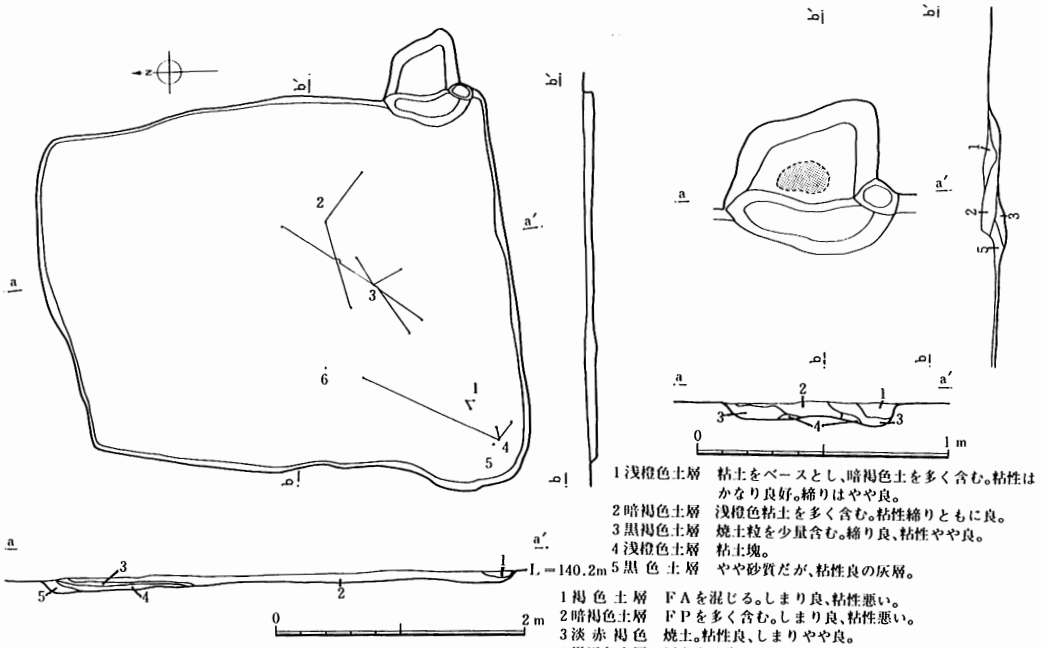
カマドは東壁南部に設置されている。形態は壁外に幅60cm、長さ40cmに不整方形状に掘り込んでおり、その前面に20×65cm、深さ４cm程度の土坑をもつ、この掘方内より石材の出土は認められない。燃焼部は掘方中央部に焼土が存在することより、住居址壁外に存在したことが認められる。この点より袖はあまり発達しておらず、さらに本住居址と同一時期の住居址が石組みのカマドであることから本カマドも同様な構造と思われる。

遺物は床面もしくは若干浮いた状況で出土している。全て小破片で、住居址南西部とカマド内に集中している。北西部は削平を受けたためか全く出土していない。１～６まで全てほぼ床面より出土している。１は住居址西北部より出土しているが、この他同一個体と考えられる細片（接合できなかった。）が周辺に散在している。２と３は遺物の最も集中する部分より出土し、各破片は飛び散った状態で出土している。４は２と３同様に各破片が飛散した状況で出土しており、周辺には遺物の集中が見られる。５と６はともに床面より出土している。

表３　　２号住居址出土遺物（第11図、図版16・20）

（単位cm）

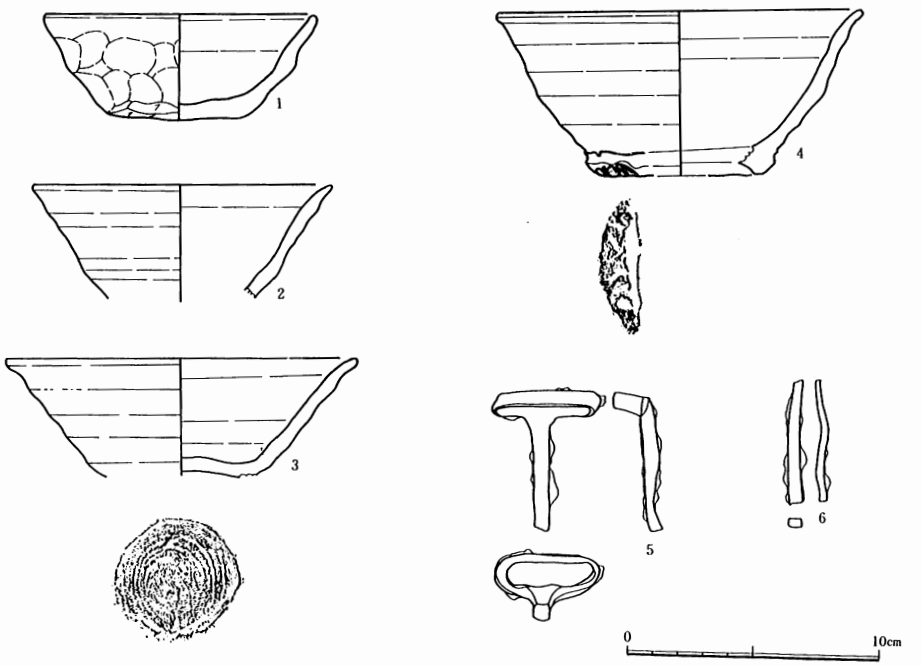
番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の調整	内面の調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	土師器 坏	10.8 4.3 5.8	不安定な平底。やや内湾する口縁部	底部削り。体部指頭による調整。口縁部横撫。	撫で。	①赤褐色②やや不良③⅓④礫を含む。
2	須恵器？ 坏	12.0 —— ——	若干外反する口縁部。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①浅黄褐色②酸化軟質③口縁部⅓④礫を多く
3	須恵器 埦	14.2 —— ——	外反する口唇部。高台。	ロクロ整形。底部回転糸切り末調整。	ロクロ整形。	①灰～灰白色②環元軟質③口縁部⅓欠損④やや砂質⑤かなりいびつ。
4	須恵器？ 埦	14.4 6.7 6.4	玉縁状の口縁部。つぶれた高台。	ロクロ整形。高台に「ハ」字状の刻目。	ロクロ整形。	①褐色～黒色②やや不定③口縁部⅓④礫多し
5	鉄器	用途不明。楕円形のリング状部分に断面方形の棒状部が付加されている。				
6	鉄器	用途不明。長方形の断面をもち、中程で波状となる。				



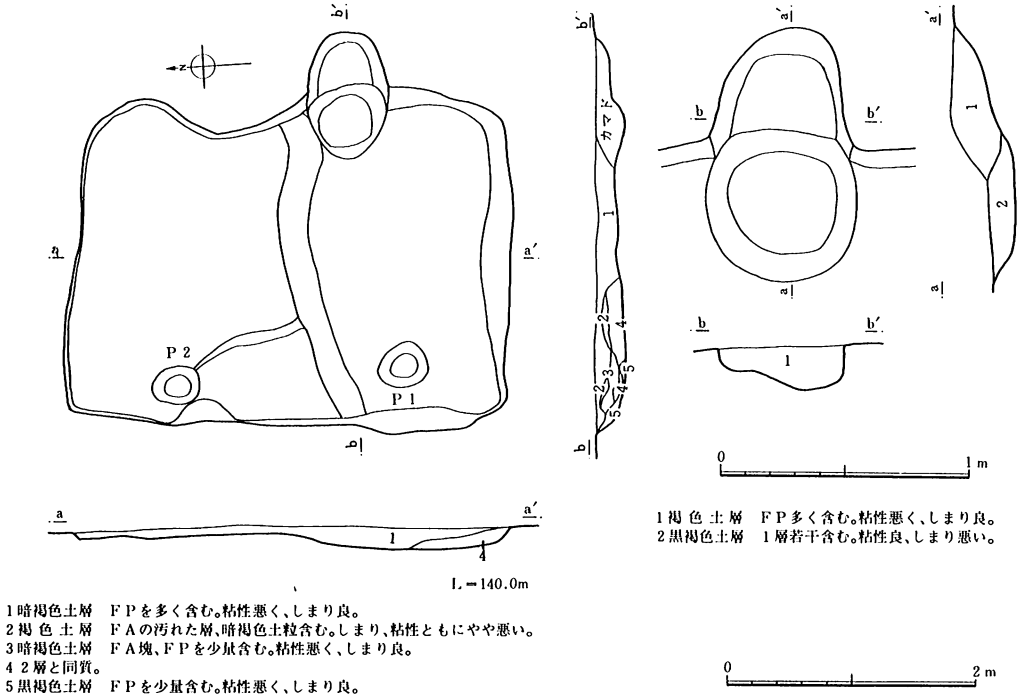
1浅橙色土層　粘土をベースとし、暗褐色土を多く含む。粘性はかなり良好。締りはやや良。
2暗褐色土層　浅橙色粘土を多く含む。粘性締りともに良。
3黒褐色土層　焼土粒を少量含む。締り良、粘性やや良。
4浅橙色土層　粘土塊。
5黒 色 土 層　やや砂質だが、粘性良の灰層。

1褐 色 土 層　ＦＡを混じる。しまり良、粘性悪い。
2暗褐色土層　ＦＰを多く含む。しまり良、粘性悪い。
3淡 赤 褐 色　焼土。粘性良、しまりやや良。
4黒灰色土層　灰を多く含み、やや砂質、しまり、粘性ともにやや良。
5黒 色 土 層　白色の軽石多く含む。粘性悪く、しまり良。

第10図　２号住居址実測図



第11図　２号住居址出土遺物実測図・拓図



第12図　3号住居址実測図

3号住居址（第12図、図版4－1、2）

本住居址は調査区西部のａ－２区に位置し、東へ約２ｍに４号新・古住居址、西へ約１ｍに12号住居址がそれぞれ存在する。確認面は標準土層第Ⅱ層である。平面形は3.54ｍ、東西2.8ｍの方形を呈す。壁は確認面より最大15cmで、傾斜し立ち上がる。床面は中央部に高さ８cm程度の段が認められ、北半部が高く、南部が低くなっている。床面の硬度は軟弱である。周溝は無く、土坑が西部に２ケ所存在する。これら土坑は円形を呈し、深さはP_1が10cm、P_2が４cmである。

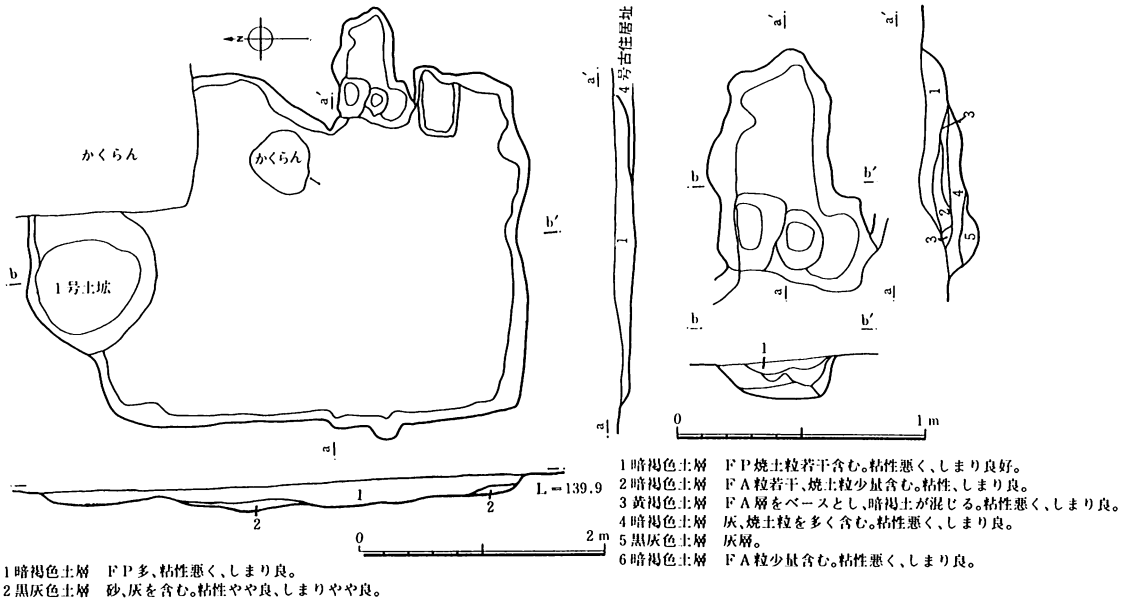
カマドは東壁南寄りに設置されている。壁外へ幅58cm、長さ50cmの半円形に堀り込み、壁内に径60cm、深さ18cmの円形土坑を掘り込む。覆土内には焼土が全く無く、はたしてカマドとして機能したか疑問がもたれる。

遺物は全く出土していない。

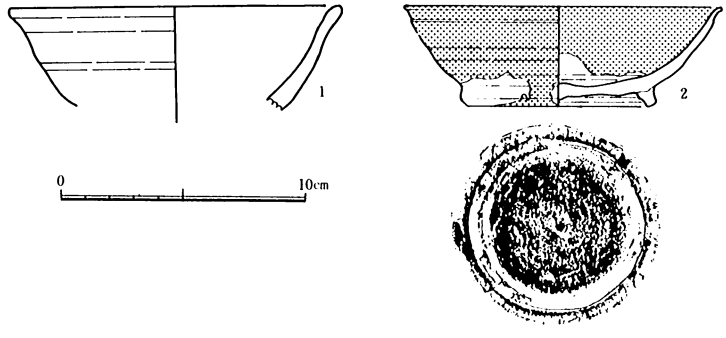
4号新住居址（第13図、図版5－1）

本住居址は調査区西部のａ－２区に位置し、南東部で４号古住居址を切り、北部で１号土坑により切られており、また住居址北東部は攪乱により削平を受けている。確認面は標準土層第Ⅱ層である。平面形は南北3.5ｍ、東西2.9ｍの長方形を呈し、主軸方向はＮ－90°－Ｅである。

壁は確認面より16cm程度で、ゆるい傾斜をもって立ち上がる。床面は標準土層第Ⅲ層中に構築



第13図　4号新住居址実測図



第14図　4号新住居址出土遺物実測図・拓図

されており、一部が4号古住居址の覆土を床面とする。床面の硬度はやや軟弱である。貯蔵穴状の土坑はカマドの南側に東壁に接して検出されている。形態は長径56cm、短径34cmの長方形を呈し、深さは床面より22cmを測る。土坑の壁はほぼ直立し、底面は平担である。周溝・柱穴は検出されていない。

カマドは東壁南寄りに設置されており、4号古住居址の覆土を掘り込み構築されている。カマドの両脇の壁は袖状に突出して掘り残こされており、燃焼部～煙道部は壁外へ幅28cm、長さ35cmに掘り込み構築されている。また、焚口部には石材の抜き取りの痕跡と考えられるピットが認められ、本カマドも石組みと考えられる。

遺物は極めて少なく、カマドおよびその前面に若干出土したにすぎない。1はカマド内より

出土、２はカマド前面の覆土より出土している。

表４　　４号新住居址出土遺物（第14図、図版17）

（単位cm）

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	須恵器 坏	13.4 —— ——	器肉が厚い。口唇部肥厚し、やや外反。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①灰白色②環元軟質③¼④礫多く粗
2	灰釉陶器 埦	12.9 4.1 7.4	三月高台。口縁部に段を有し、口唇部強く外反する。	右回転ロクロ整形。付高台。底部糸切り後、撫で調整。	右回転ロクロ整形。	①褐色色②酸化③口縁部¾欠損④密⑤口唇部に若干スス、つけがけ

４号古住居址（第15図、図版５－２、６－１）

本住居址は調査区北部のｂ－２区に位置し、北西部を４号新住居址により切られている。確認面は標準土層第Ⅱ層である。平面形は南北3.1ｍ、東西2.0ｍの長方形を呈し、主軸方向はＮ－97°－Ｅである。壁は北壁の西部から西壁北部にかけて４号新住居址により削平されており、確認面まで高さが８㎝で、やや傾斜して立ち上がる。床面は標準土層第Ⅲ層中に構築され、ほぼ平担である。床面硬度は全体的に軟弱である。周溝・柱穴等は無い。

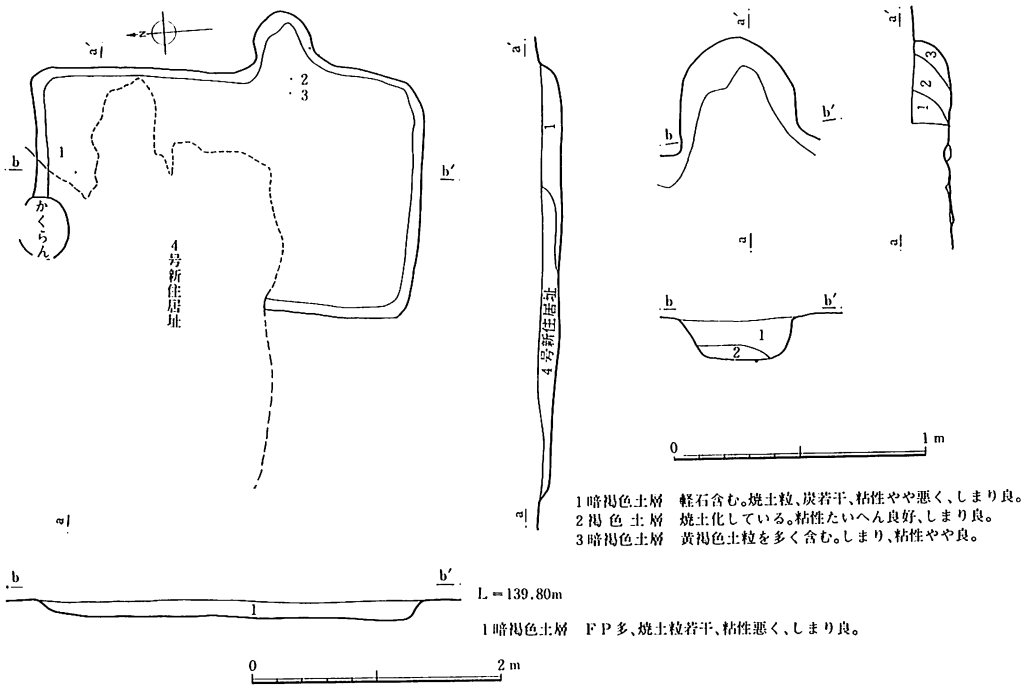
カマドは東壁南寄りに設置されている。石組のカマドと考えられるが、石材の出土は無く、堀方のみ残存している。掘方は壁外へ幅45㎝、長さ45㎝の規模で半円形の平面をもって堀り込んでいる。燃焼部は床面と同一レベルで平担である。煙道部は直立して立ち上がる。

遺物は出土量が極めて少なく、カマド前面にやや集まりが認められた。１は住居址北部の床面より出土している。２と３はカマド前面の床面より出土している。

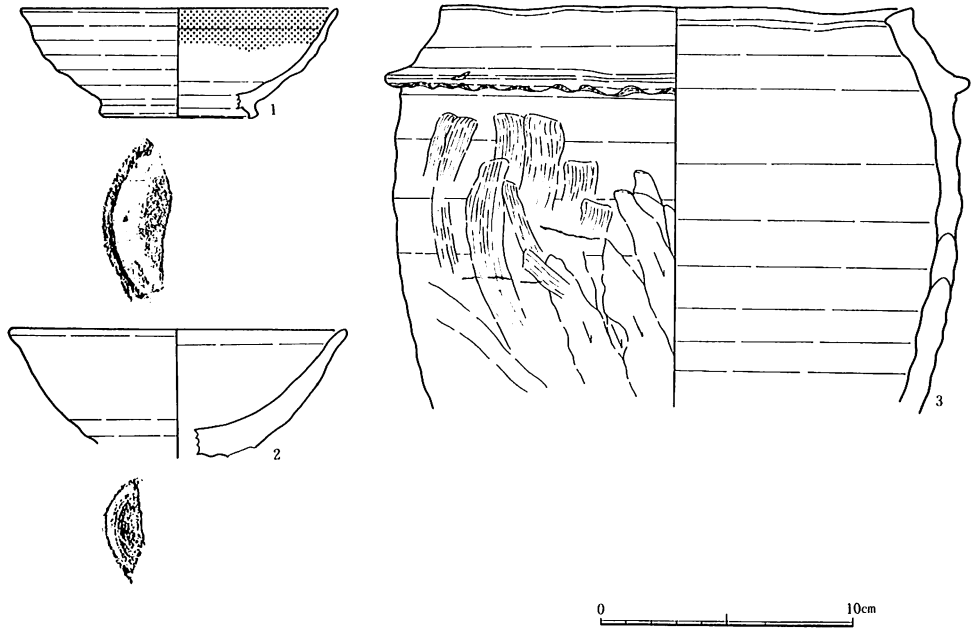
表５　　４号古住居址出土遺物（第16図、図版17）

（単位cm）

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	灰　釉 碗	12.8 4.4 6	口縁部外反気味。三ヵ月高台。	底部回転糸切り後、調整、ロクロ整形。	ロクロ整形	①灰白色②良好③¼④密⑤つけがけ
2	碗	13.6 —— ——	厚い器内。口縁部。外反。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①外面明赤燈色内面黒灰色②酸化③¼④礫多し。
3	羽　釜	18.6 —— ——	内湾する口縁部。丸味の強い鍔。	ロクロ整形後、左上から右下への削り、縦位の撫で。鍔貼付後、末調整。	ロクロ整形。	①外面明赤褐色内面暗黄褐色②酸化③¼④密⑤鍔の下部に指頭痕が残る。



第15図　4号古住居址実測図



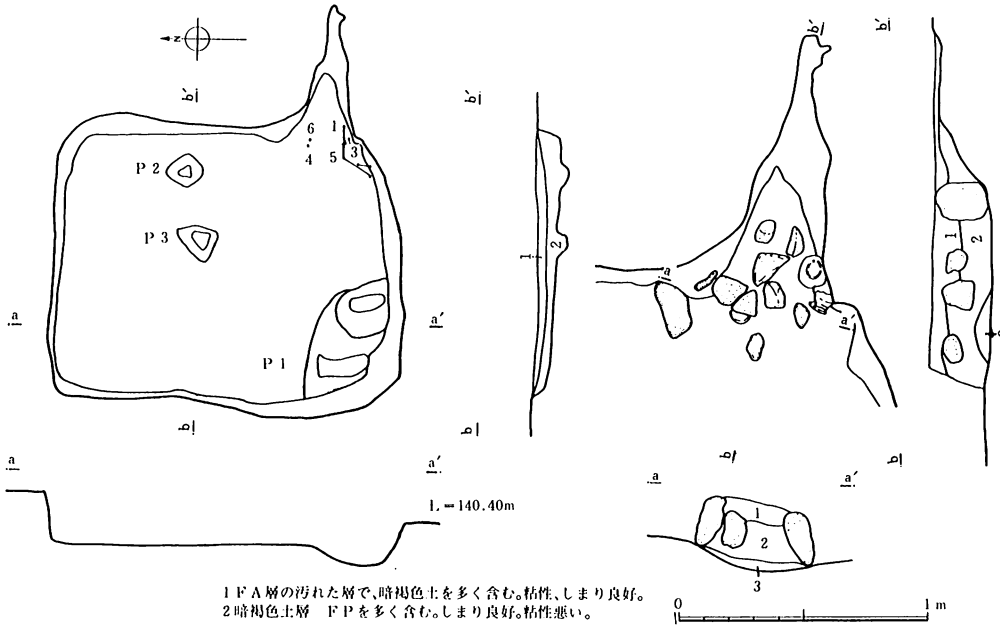
第16図　4号古住居址出土遺物実測図・拓図

5号住居址（第17図、図版6－2、7－1）

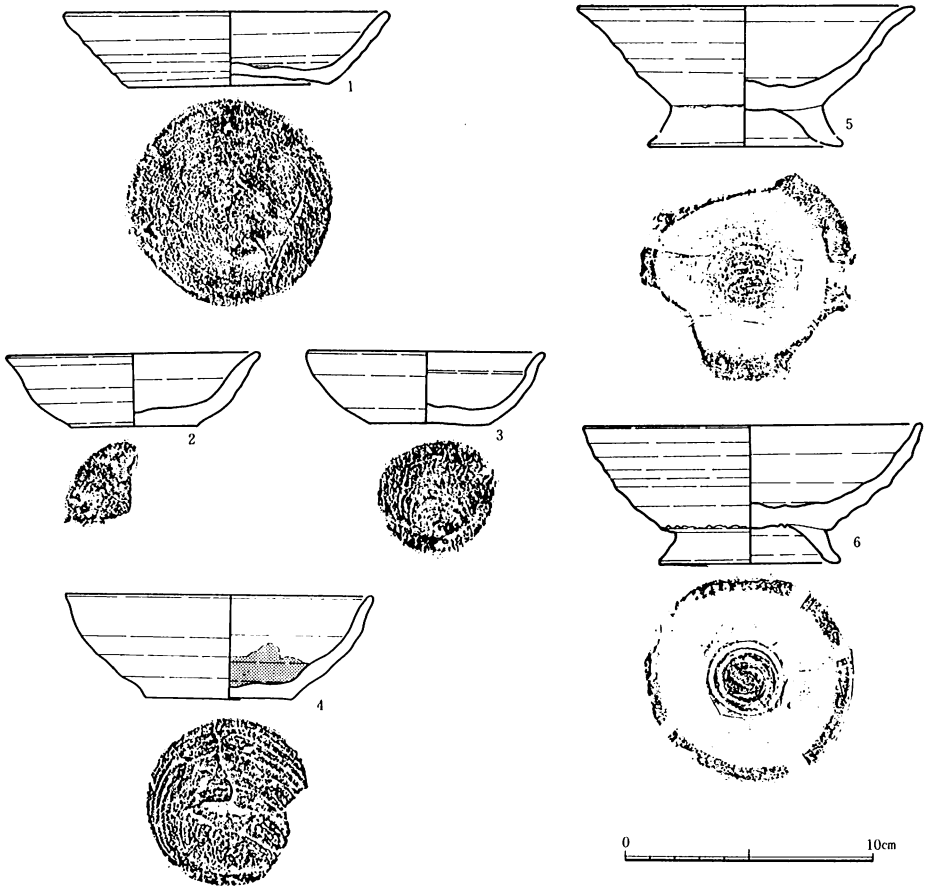
本住居址はa－2、b－2区にまたがって存在し、住居址群のほぼ中央部に位置する。西へ約2mに6号住居址が、東へ約2mに1号住居址が、北へ約3.5mに4号住居址が、南へ約4mに7号住居址がそれぞれ存在する。住居址の覆土は極めて堅く締っており、他の住居址と大きく異なっているが、堆積状況に変化は認められない。平面形は南北2.8m、東西2.3mの南北に長い長方形を呈し、主軸方向はN－90°－Eである。床面は標準土層第Ⅲ層中に構築されており、ほぼ平坦である。床面の硬度は全体的にやや軟弱と言える。壁は高さが確認面より20cm程度で、ほぼ直立して立ち上がる。周溝・柱穴は認められない。貯蔵穴状の土坑は住居址西南部コーナーに接してP_1が存在する。P_1は長径70cm、短径60cmを呈し、2つの土坑が重なったような形態である。深さは東部で床面より20cm、南部で12cm程度となる。この他に床面中央部と東部にP_3・P_4が検出されている。P_3は長径30、短形25cmの三角形を呈し、深さ10cm程度である。P_4は径30cm程度の不整方形を呈し、深さ7cm程度である。

カマドは東壁の南部、東南コーナーに接して設置されている。焚口から燃然部にかけて石組みが残存しており、煙道部には認められない。この点から煙道部は素掘りのままの可能性が考えられる。掘方は壁外へ幅60cmで長さ1m掘り込んでおり、平面形はV字状となる。

遺物は極めて少なく、カマド内およびその周辺に出土したのみである。1・2・4・6はカマド内より出土している。5はカマド内と南壁に接して床面の1点と接合している。3は覆土より出土している。



第17図　5号住居址実測図

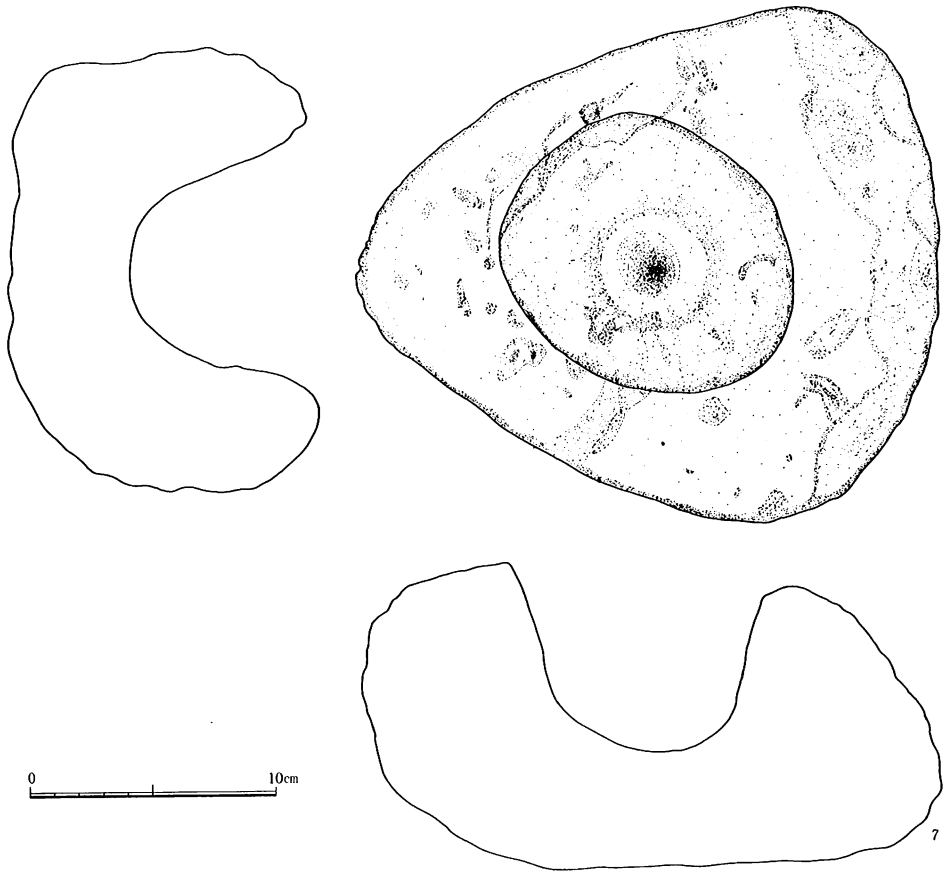


第18図　5号住居址出土遺物実測図・拓図（1）

表6　　5号住居址出土遺物(1)（第18図、図版17）

（単位cm）

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	須恵器 坏	13.0 3.1 8.2	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。大きい底部。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①紫灰色②環元良好③完形④密
2	坏	10.3 3.0 5.1	外反する口唇部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①褐色②酸化③¼④粗
3	坏	9.6 3.0 4.8	外反する口唇部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①明褐色②酸化③口縁部¼欠損④粗
4	坏	12.4 4.3 6.0	口唇部内面に沈線。口縁部若干外反。	底部回転糸切り未調整。	ロクロ整形。	①暗褐色②酸化③口縁部½欠損④礫含む⑤内面底部にスス



第19図　5号住居址出土遺物実測図（2）

表7　　5号住居址出土遺物(2)（第18・19図、図版17）

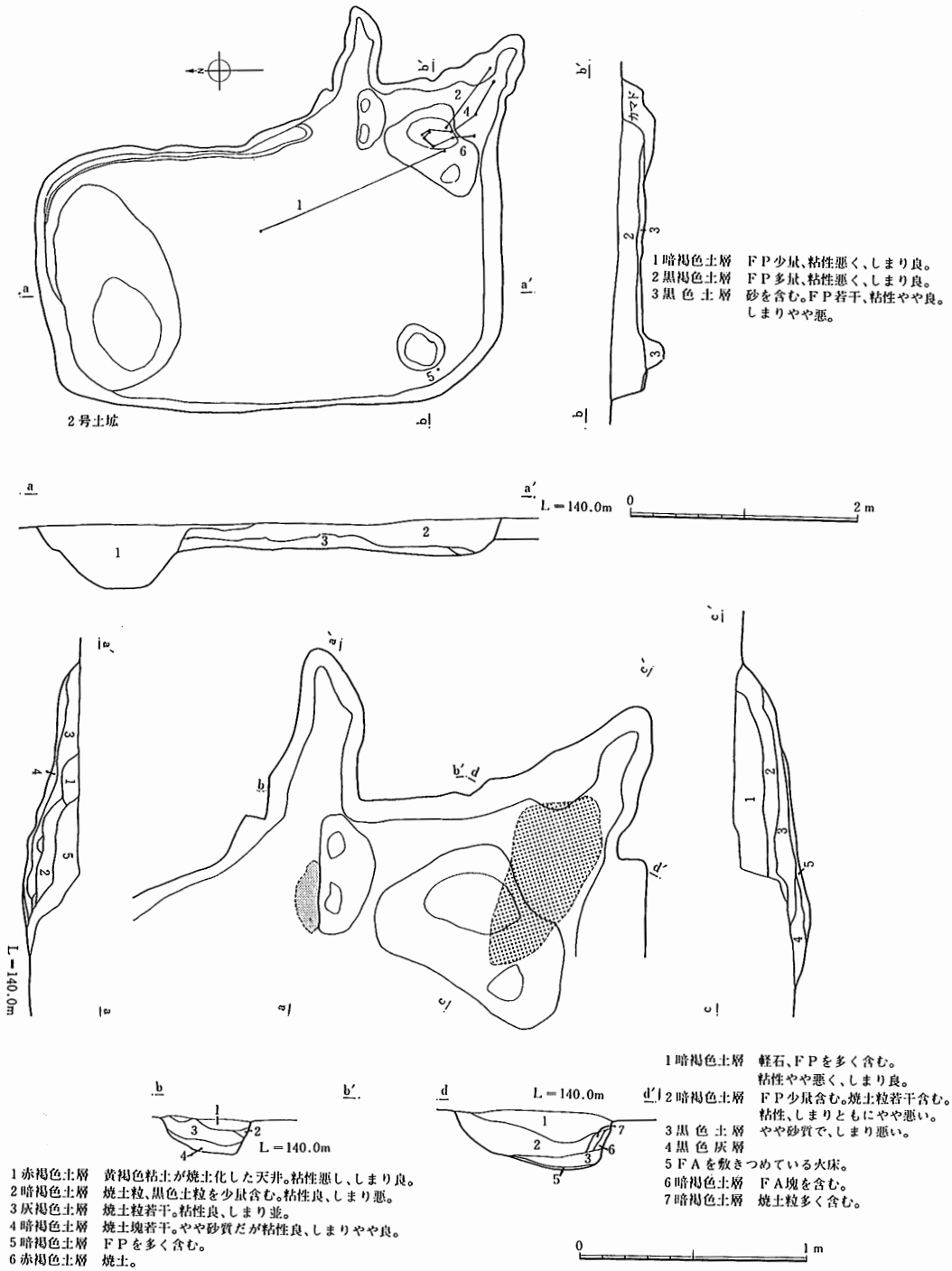
（単位cm）

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
5	椀	13.5 5.7 7.6	口縁部大きく外反。高い高台。	右回転ロクロ整形。底部不明。	右回転ロクロ整形。	①暗赤褐②酸化③口縁部～体部⅔欠損④礫を多く含む。
6	椀	13.6 5.7 7.2	丸い体部。高い高台。	左回転ロクロ整形。底部不明。	左回転ロクロ整形。	①暗褐色②酸化③口縁部½欠損④密
7	石　製　品	浮石安山岩製。中央部に円形の孔がある。				

6号新住居址（第20図、図版7－2、8－1・2）

本住居址は調査区東部のb－1区に位置し、6号古住居址を切り、2号土坑および畝状遺構

により切られている。また、東へ約１ｍに２号溝が走っている。確認面は標準土層第Ⅱ層であ



第20図　６号新住居址実測図

る。壁は確認面より高さ30cmで、ほぼ直立する。また、南壁は6号古住居址覆土よりなる。床面はほぼ平担で、全体的に軟弱である。周溝は東壁から北東コーナーまで存在し、幅5cm、深さ5cmのU字形を呈す。貯蔵穴状の土坑は西南コーナーに存在する。形態は径42cmの不整円形を呈し、深さ15cm程度である。

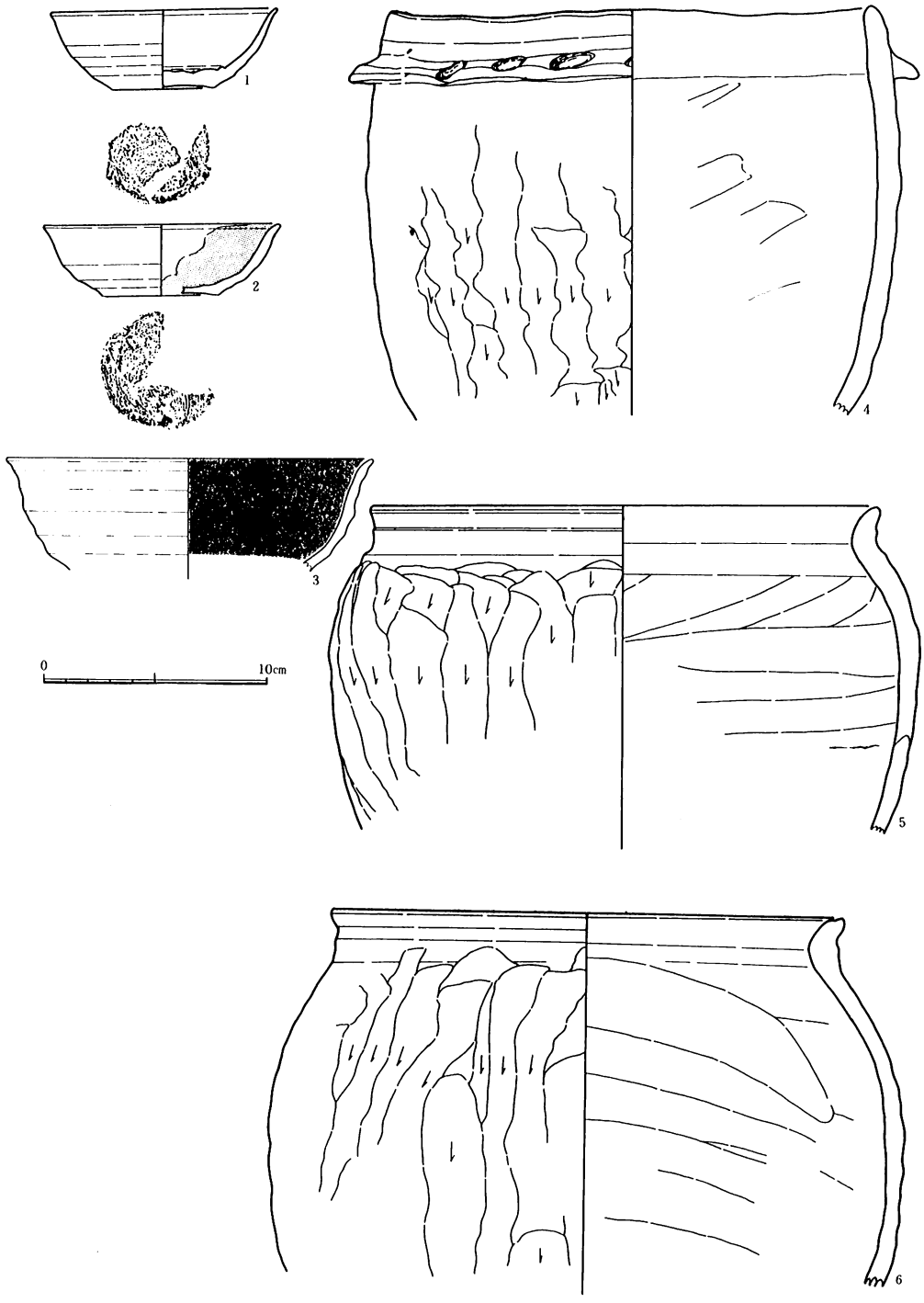
カマドは東壁の南部と南東コーナーに各1基設置されている。東壁南部のカマドは覆土中に住居址の壁が掘り込まれたような土層推積状況が認められ、さらに東南部コーナーのカマドから出土した遺物が住居址床面の遺物と接合することより、東壁南部のカマドが構築廃棄された後に、東南コーナーのカマドが構築されたと考えられる。東壁南部のカマドは壁外へ幅40cm、長さ75cm掘り込んで構築されている。また、カマドの西南部は東南コーナーのカマド構築の際に破壊されたと思われ、変形している。袖は検出されず、他の住居同様に石組みと考えられる。煙道は細長く延びており、ゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。燃焼部の床面にはＦＡ（標準土層第Ⅱ層）が長さ40cm、幅10cmの範囲に敷かれている。厚さは1cm程度で、熱による赤色化は認められない。東南コーナーのカマドは壁外へ幅50cm、長さ70cm程度掘り込み構築されており、東壁南部のカマドとほぼ同じ構造である。袖は検出されず、石組みと考えられる。煙道は長く延びており、ゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。燃焼部の床面にはＦＡ（標準土層第Ⅱ層）が長さ87cm、幅39cmの範囲に敷かれている。厚さは2cm程度で、熱による赤化は認められない。

遺物はやや多く出土しており、住居址内全面に分布する。1はカマド内と床面中央部とが接合している。2・4・6はカマド内より出土している。3は覆土出土である。5は住居南西コーナー床面より出土している。

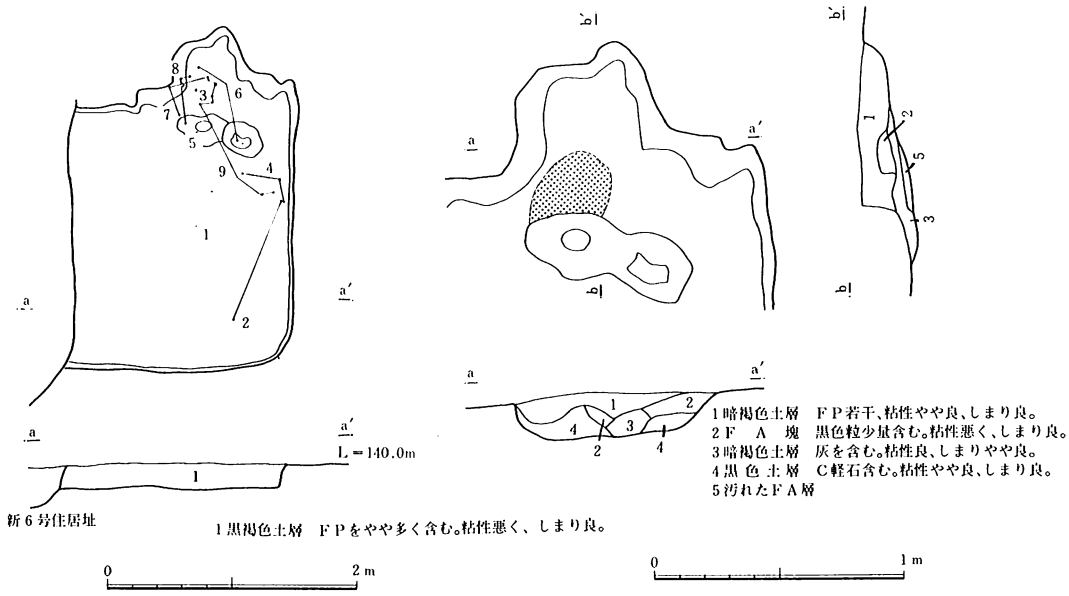
表8　　6号新住居址出土遺物（第21図、図版17）

（単位cm）

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	坏	10.2 3.5 4.6	口縁部外反。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①明赤褐②酸化③¼④密、礫多い
2	坏	10.5 3.2 5.7	口縁部外反。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①暗褐色②酸化③¼④密、礫多し⑤スス付着
3	坏	16.2 —— ——	口縁部外反。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①外面黄褐色内面黒色②酸化③¼④砂質⑤内黒
4	土師器 羽釜	21.2 —— ——	口縁部が短かく、口唇部丸い。	口縁部横撫で。胴部上から下への削り。鍔雑な貼り付け。	口縁部横撫で。胴部横位の撫で。	①赤褐色②酸化③胴上部～口縁部¼④礫多し
5	土師器 土釜	22.2 —— ——	口縁部は短く、やや外反気味となり、中位に稜をもつ。胴部は上位に最大径をもつ。	口縁部横撫で後、胴部を上から下への削り。	口縁部横撫で。横位の撫で。	①暗赤褐②酸化③口縁部～胴上部⅓④礫含む。
6	土師器 土釜	22.4 —— ——	口縁部は短く、やや外反気味となり、中位に稜をもつ。胴部は上位に最大径をもつ。	口縁部横撫で後、上から下への削り。	口縁部横撫で。胴部を斜位の撫で。	①暗赤褐②酸化③口縁部～胴上部¼残④礫を含む。



第21図　6号新住居址出土遺物実測図・拓図



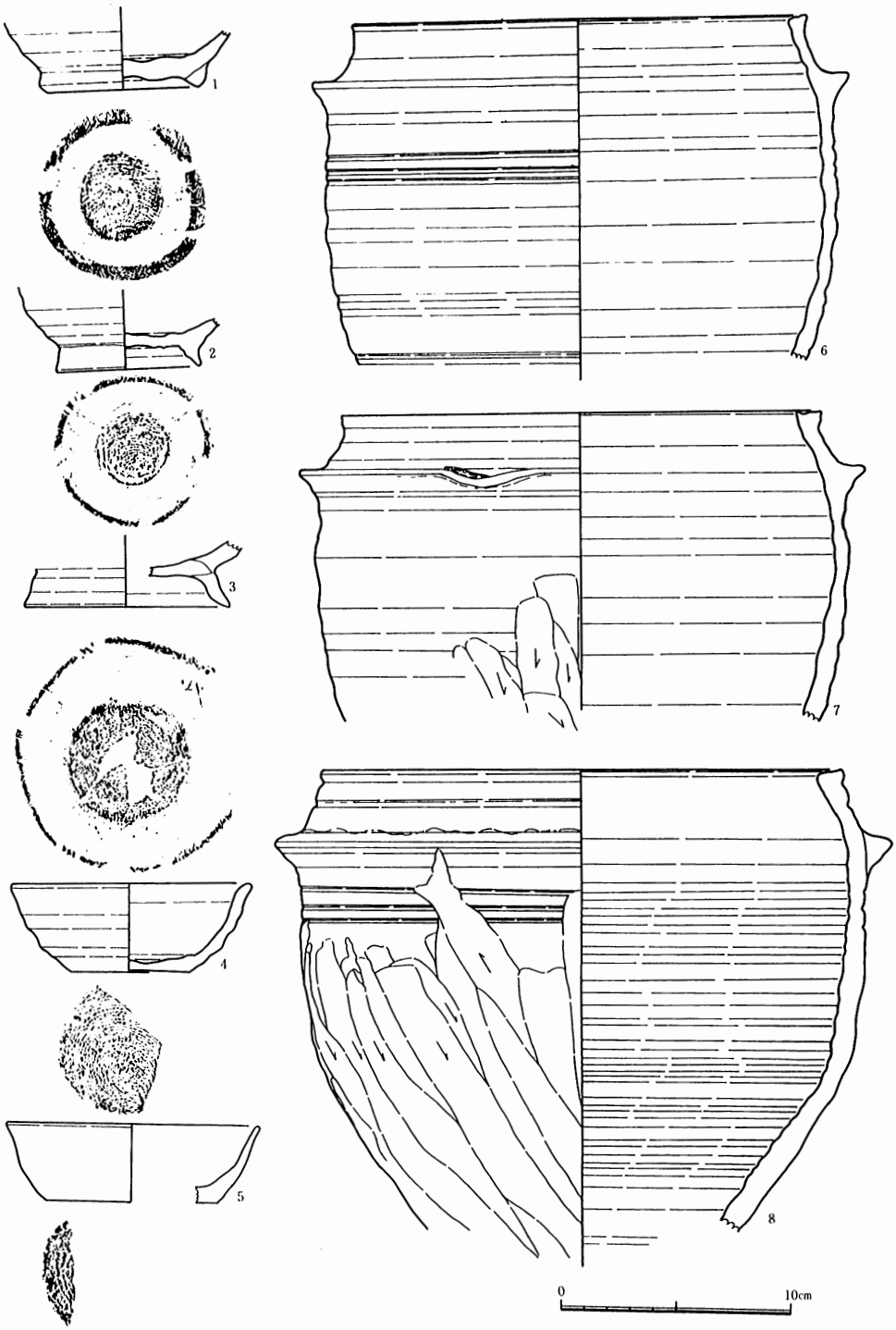
第22図　６号古住居址実測図

６号古住居址（第22図、図版９－１・２）

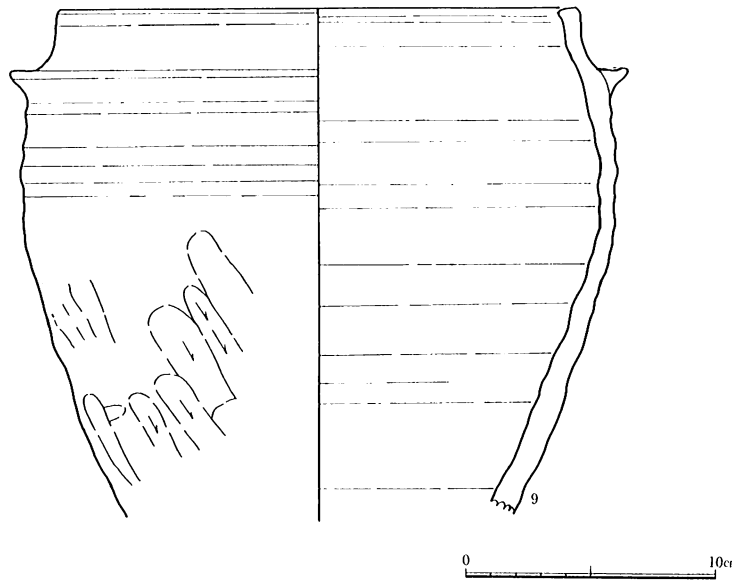
本住居址は調査区西部のｂ－１区に位置し、６号新住居址、畝状遺構により切られている。また、東側に２号溝が、西南約２ｍに７号住居址が、東南約２ｍに３号土坑がそれぞれ存在する。確認面は標準土層第Ⅱ層である。平面形は北部を６号新住居址により削平されているため不明であるが、長方形が推定できる。規模は南北が1.8ｍ以上、東西が2.1ｍ、主軸方向はＮ－90°－Ｅである。床面は標準土層第Ⅱ層中に構築され、ほぼ平坦である。床面の硬度は全体的に軟弱である。周溝・柱穴等は検出されていない。

カマドは東壁の南端に設置されている。カマドの掘り方は壁を幅65cm、長さ55cmの方形に掘り込んでいる。煙道部は先端で直立して立ち上がる。燃焼部底面には焼土が25×30cmの範囲に推積しており、その前に浅い土坑が存在する。この土坑は長径68cm、短径26cmの不整形を呈し、深さ10cm程度である。

遺物は住居址の東半部に集中しており、特にカマドおよびその周辺に多く出土している。１は住居址中央覆土中より出土している。２は住居址西部の覆土中より出土している。３はカマド内より出土している。４は住居址東南部の覆土および床面より出土している。５はカマド正面の土坑覆土上面より出土している。６・７・８はカマド内より出土している。９はカマド内および住居址東南の床より出土している。



第23図　6号古住居址出土遺物実測図・拓図（1）



第24図　6号古住居址出土遺物実測図（2）

表9　　6号古住居址出土遺物（第23・24、図版18）

(単位cm)

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の調整	内面の調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	椀	—— —— 6.6	低い高台。丸い体部。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①黒灰色②酸化③底部④砂質
2	椀	—— —— 6.2	高い高台。丸い体部。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①暗褐色②酸化③底部④砂質
3	椀	—— —— 9.0	高い高台。	底部撫で。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①黄褐色②酸化③底部④砂質⑤底部外面にス
4	坏	10.4 3.9 5.2	若干外反する口縁部。	底部糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①明赤褐色②酸化③⅓④砂質
5	坏	11.2 3.4 7.6	若干外反する口縁部。大きな底部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①赤褐色②酸化③¼④砂質
6	羽　釜	19.8 —— ——	内湾する口縁部。三角形の鍔。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①灰白色②環元③胴上部～口縁部¼④密
7	羽　釜	21.0 —— ——	口唇部に沈線。	ロクロ整形後、胴下部に縦位の削り。	ロクロ整形。	①明赤褐色～灰白色②環元～酸化③口縁部⅓④密
8	羽　釜	22.6 —— ——	口唇部肥厚。やや丸味を帯びた鍔。	ロクロ整形後、斜位の削り。	ロクロ整形。	①褐色②酸化③⅓④密
9	羽　釜	21.0 —— ——	内湾する口縁部。	ロクロ整形後、斜位の削り。	ロクロ整形。	①明赤褐～灰色②酸化～環元③⅓④礫多し

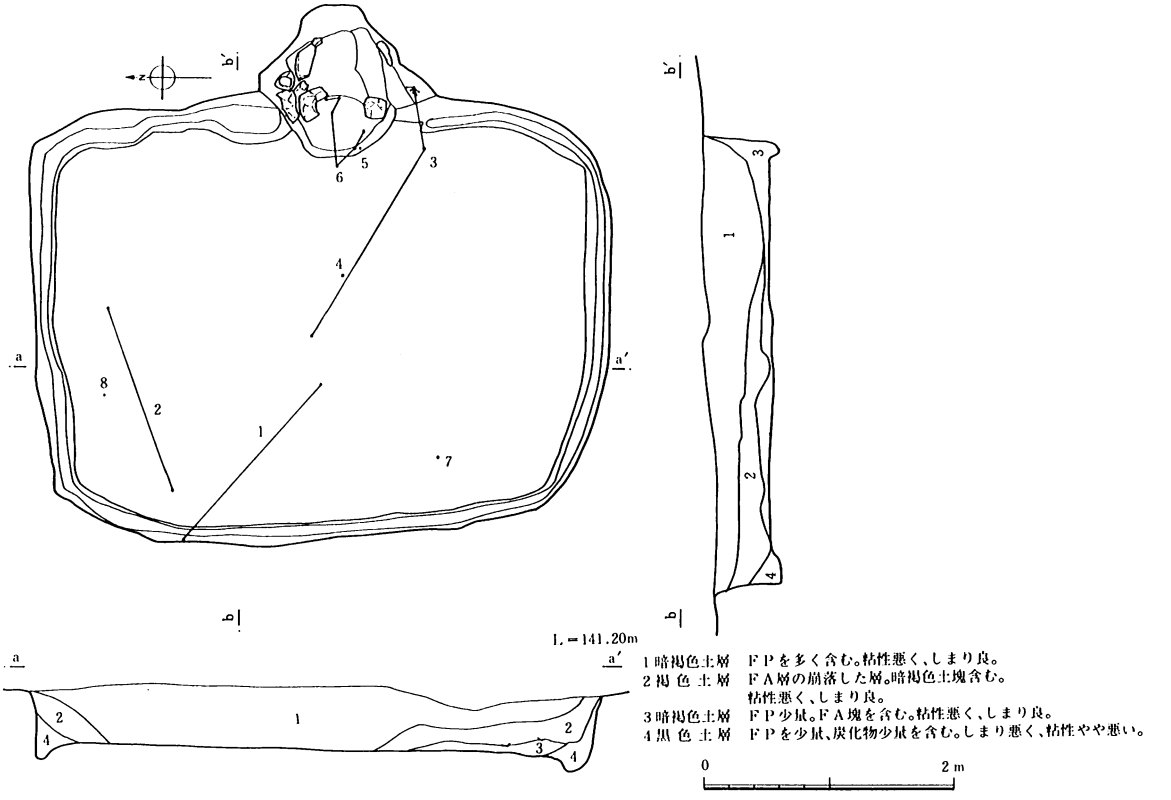
7号住居址（第25・26図、図版10－1・2）

本住居址は調査区中央部のb－2区南東寄りに位置し、北東に6号新・古住居址が、北西へ約2mに5号住居址が、南東約7mに10号住居址がそれぞれ存在する。確認面は標準土層第Ⅱ層である。床面は標準土層第Ⅳ層中に構築されており、全体的にやや軟弱である。平面形は南北4.6m、東西3.7mの隅丸方形である。壁は比較は高く、確認面より50cmでほぼ直線的に立ち上がる。周溝はカマド部分を除き、全周している。これはあらかじめカマド設置場所を決定した後に周溝が構築されたと思われる。形態は幅10cm前後、深さ10cm程度のU字形を呈す。

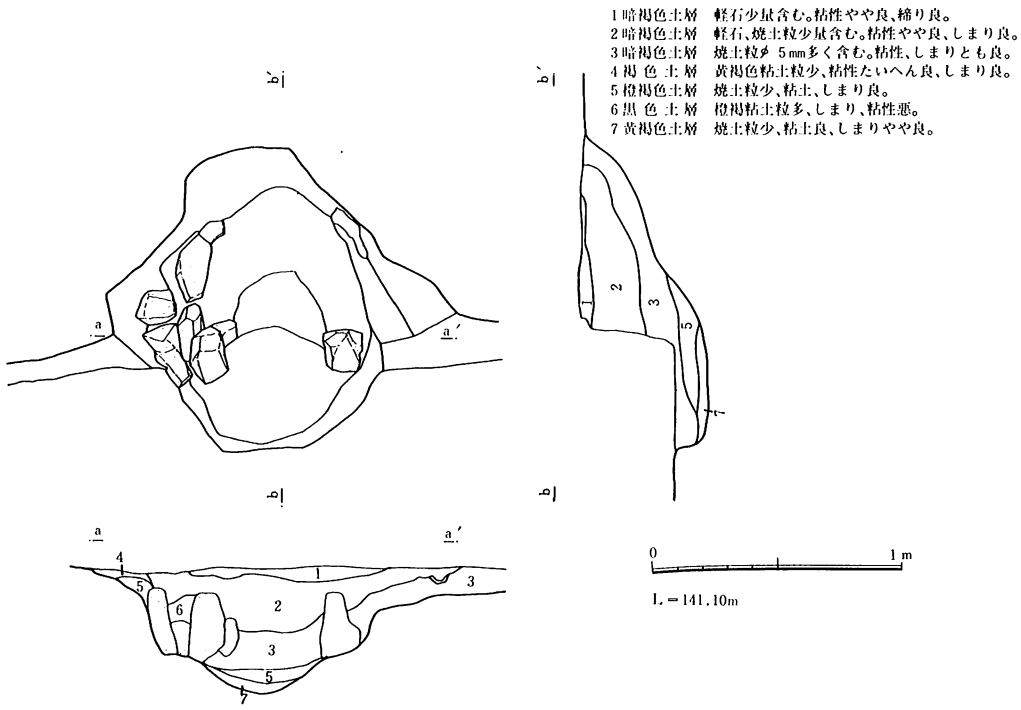
カマドは東壁中央やや南寄りに設置されている。壁外へ幅140cm、長さ90cmの土坑を堀り込み、この中に砂質凝灰岩の切石をもって焚口～煙道部を構築している。焚口は住居址の壁ライン上に位置し、前面に深さ16cm程度の土坑をもっている。燃焼部と煙道部の境にはゆるやかな段を有し、煙道部はゆるやかに立ち上がる。

段を有し、煙道部はゆるやかに立ち上がる。

遺物は覆土中に多量の遺物が出土している。1・2・4は覆土出土である。3はカマドの壁に密着して出土しており、一部が覆土中より出土している。5・6はカマド内出土である。7



第25図　7号住居址実測図



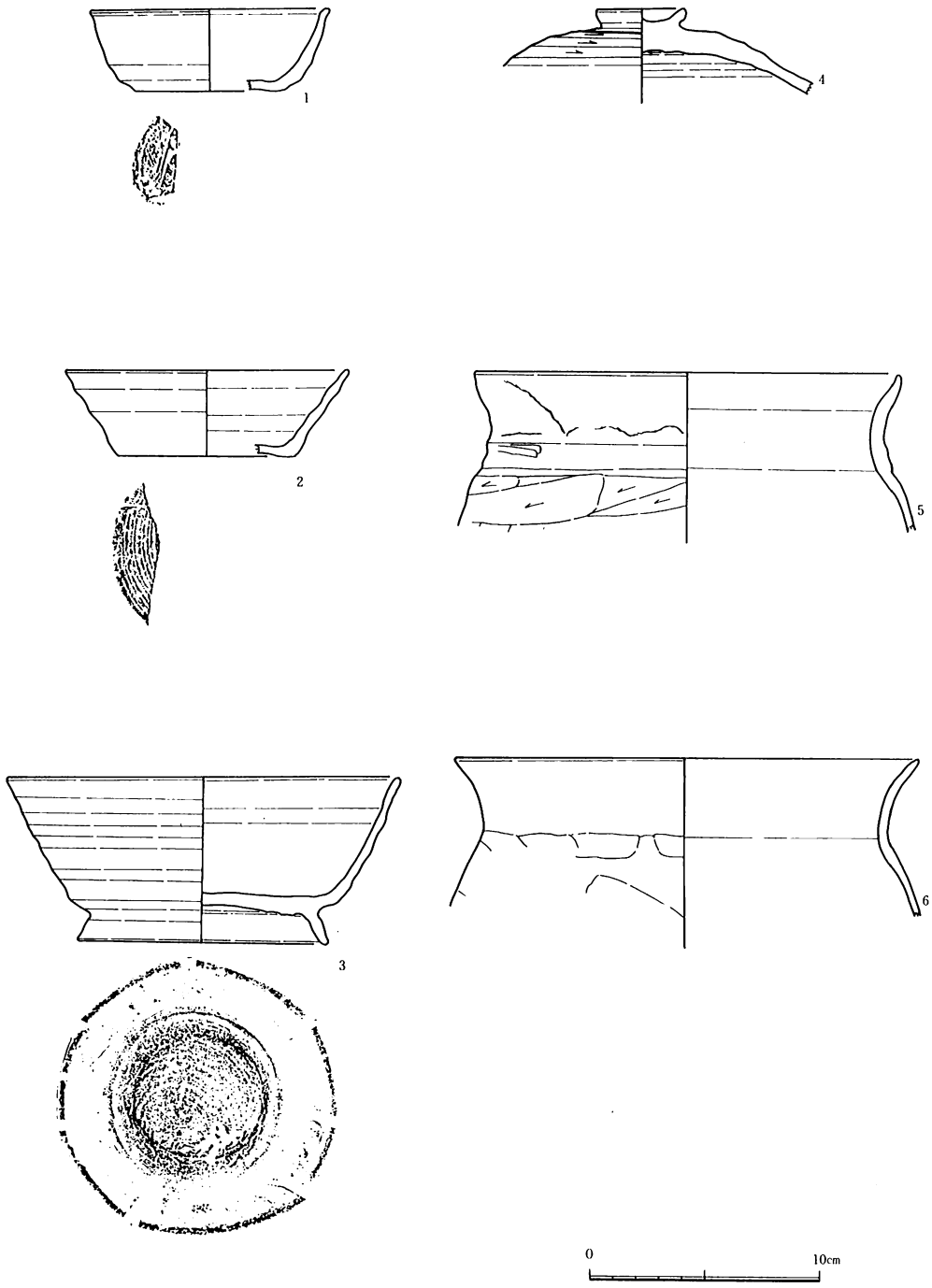
第26図　7号住居址カマド実測図

・8は床面より出土している。

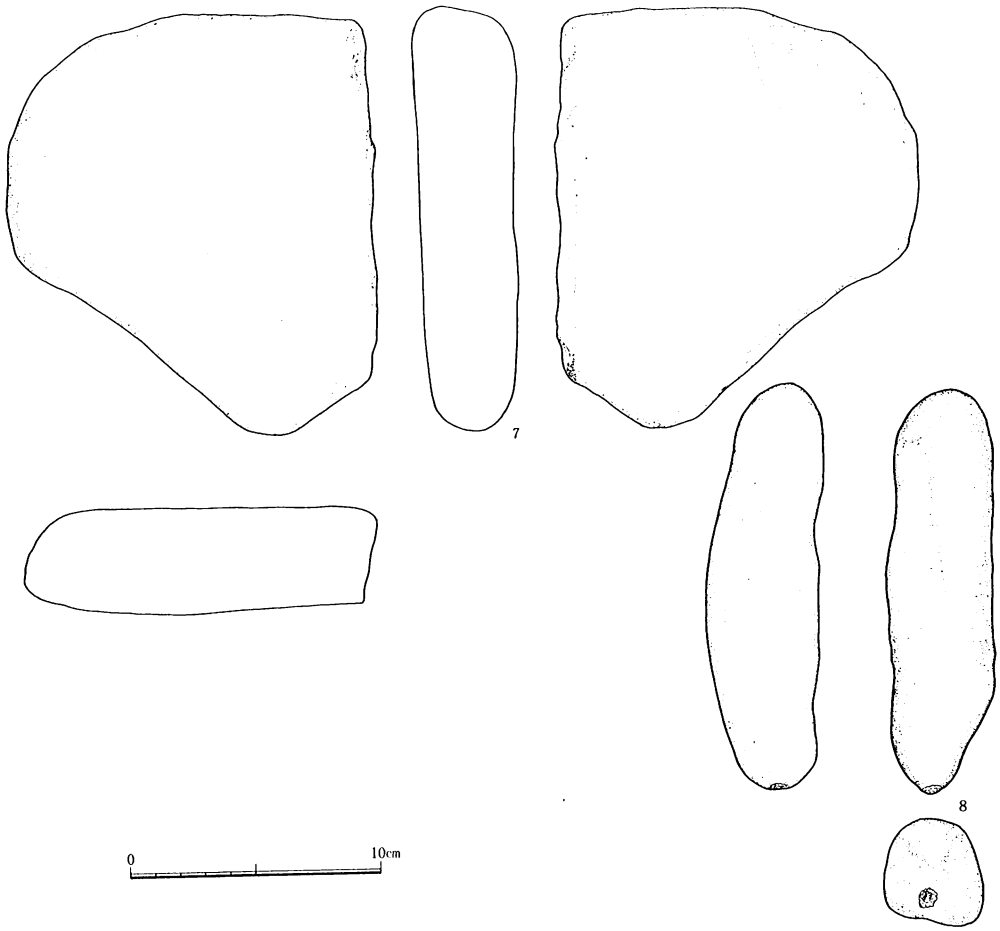
表10　　7号住居址出土遺物（第27・28、図版18・20）

（単位cm）

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	須恵器 坏	10.4 3.6 6.4	口唇部肥厚外反。やや直線的に立ち上がる体部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①灰色②環元③⅙④密
2	須恵器 坏	12.2 3.8 7.6	直線的に立ち上がる体部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①黄灰色②環元軟質③⅙④密
3	土師器 埦	17.1 7.3 5.8	直線的に立ち上がる体部。高い高台。	底部回転糸切り。	ロクロ整形。	①赤褐②酸化③口縁部½欠損④密
4	須恵器 蓋	—— —— ——	鈕は凹状をなし、中央部がわずかに凸状をなす。	天井部ロクロ整形後、右回転ロクロによる削り。	右回転ロクロ整形。	①灰色②環元③口縁部欠損④密
5	土師器 甕	18.4 —— ——	口縁部くずれたコの字。口唇部内湾気味。	口縁部横撫で後、胴部右から左への削り。	口縁部撫で。胴部撫で。	①赤褐②酸化③口縁部⅓④礫多し。
6	土師器 甕	20.2 —— ——	口縁部ゆるく外反。	口縁部横撫で。胴部削り。	口縁部横撫で。胴部撫で。	①赤褐②酸化③口縁部½④砂質
7	台　石	両面に磨耗痕をもち、やや光択を有す。				
8	叩　石	細長い礫を用い先端に打痕。				



第27図　7号住居址出土遺物実測図・拓図（1）



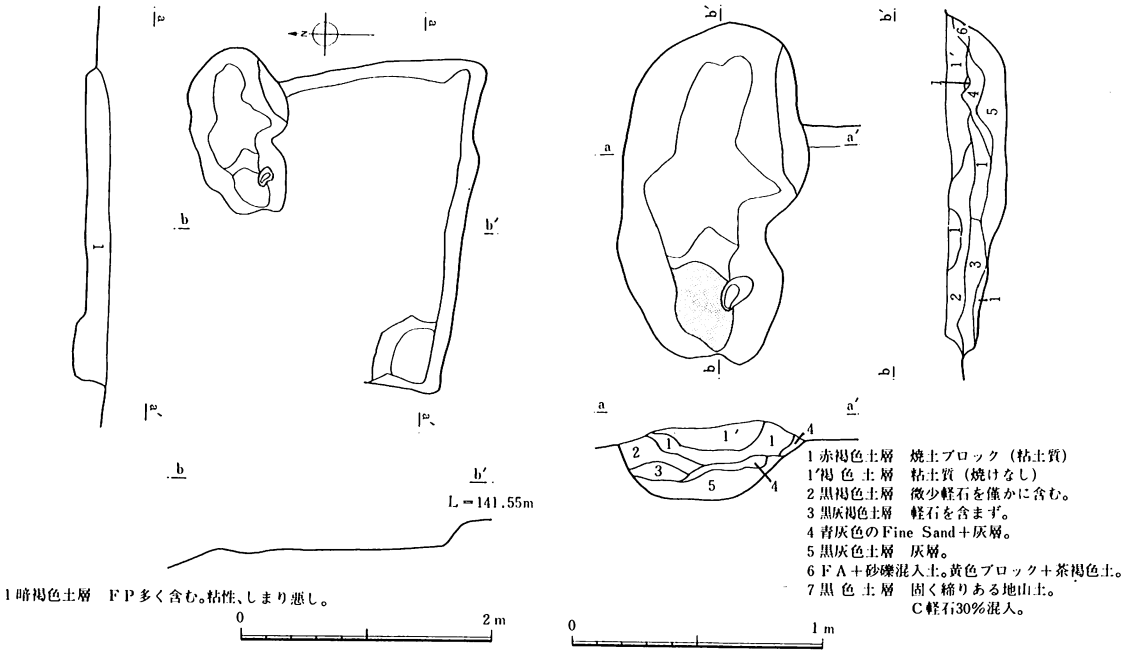
第28図　7号住居址出土遺物実測図（2）

8号住居址（第29図、図版11－1・2）

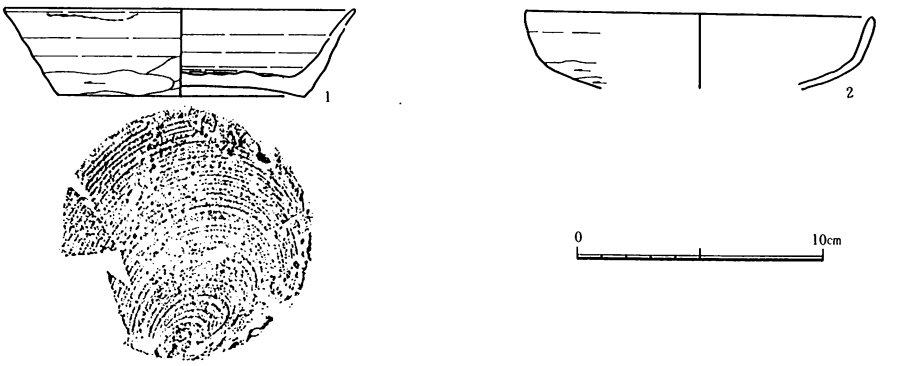
本住居址は調査区西部のa－3・4、b－3・4区にまたがって存在する。北東へ約2mに2号住居址が存在する。確認面は標準土層第Ⅱ層であるが、住居址北部はすでに標準土層第Ⅳ層まで削平されて消失している。平面形は方形もしくは長方形が推定される。規模は南北2.2m以上、東西2.6mで、主軸方向がN－90°－Eである。床面は標準土層第Ⅲ層下部に構築されており、ほぼ平担である。床面の硬度は全体的に軟弱である。壁は5cm前後で直立して立ち上がる。貯蔵穴状の土坑は住居址西南部に存在し、径60cm程度の方形を呈し、深さ10cmである。

カマドは東壁に設置されている。燃焼部は火床面の存在により壁内に存在したと思われる。袖は検出されず、他の住居址同様、石組みと考えられる。煙道部は半円形の平面をもち、先端で急激に立ち上がる。

遺物は極めて少ない。１・２ともに床面である。



第29図　８号住居址実測図

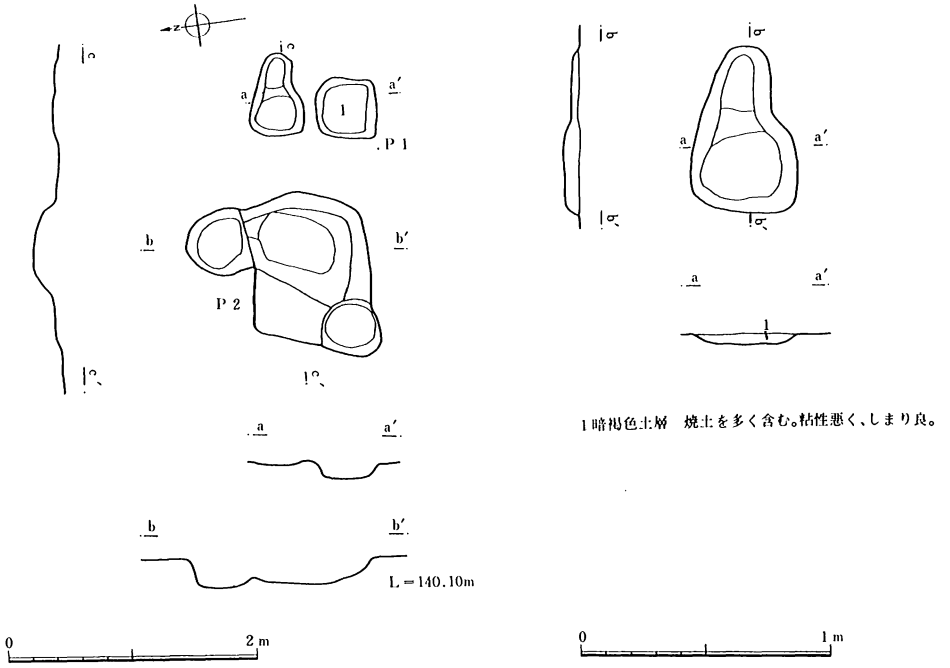


第30図　８号住居址出土遺物実測図・拓図

表11　　８号住居址出土遺物（第30図、図版11―１・２）

（単位cm）

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土
1	須恵器 坏	14.3 3.6 10.0	直線的に立ち上がる口縁部。大きな底部。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。左から右への手持ち篦削り。	右回転ロクロ整形。	①黄灰色②環元③口縁部½欠損④密
2	土師器 坏	14.2 ― ―	丸い体部。	口縁部横撫で。体部削り。	撫で。	①赤褐色②酸化③⅙④粗

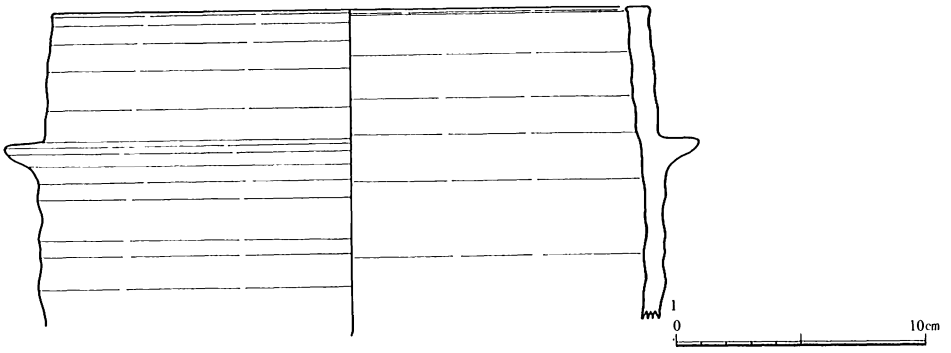


第31図　9号住居址実測図

9号住居址（第31図、図版12－1）

本住居址は調査区北西部a－2区に位置し、西へ50cm程度に4号古住居址が存在する。確認面は標準土層第Ⅱ層であるが、削平が著しくカマドおよび住居内の土坑を残すのみである。床面・壁は削平のため不明である。P_1 は貯蔵穴状の土坑で、50×45cmの方形を呈する。P_2 は不整形を呈する。カマドは底面を残すにしかすぎない。

遺物は P_1 覆土より出土している。

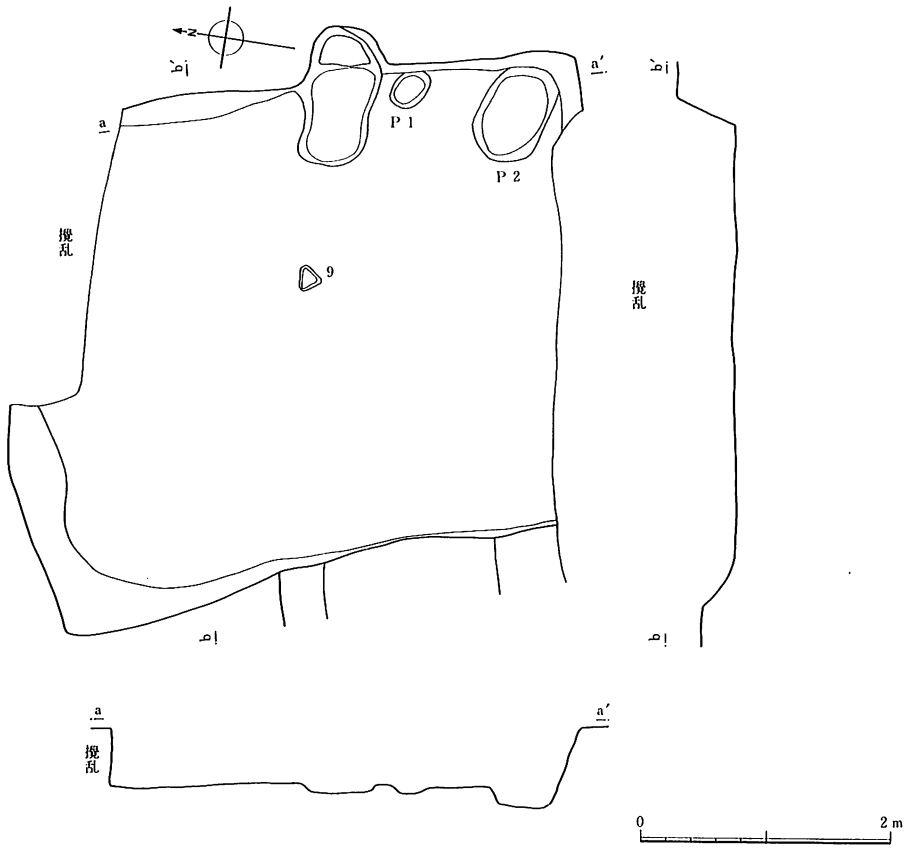


第32図　9号住居址出土遺物実測図

表12　　9号住居址出土遺物（第32図、図版19）

（単位cm）

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土
1	甕	24.0	長く直立する口縁部。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①赤褐色②酸化③口縁部～胴部⅙④密



第33図　10号住居址実測図

10号住居址（第33図、図版12－２、13・１）

本住居址は調査区東南部ｃ－１区に位置し、１号溝および２号溝により覆土を切られる。また、北壁東半部および南壁は撹乱により削平される。確認面は標準土層第Ⅱ層である。平面形は南北3.9ｍ、東西4.9ｍの長方形を呈し、主軸方向はＮ－73°－Ｅである。壁は確認面より45cm程度で、ほぼ直立するが、西壁北部ではゆるやかな立ち上がりとなる。床面は標準土層第Ⅳ層で、ほぼ平坦である。貯蔵穴状の土坑はカマド脇より P_1 が、東南コーナーより P_2 がそ

れぞれ存在する。P_1 は径28cmの円形を呈し、深さ5m程度である。P_2 は長径80cm、短形52cmの楕円形を呈し、深さは15cm程度である。

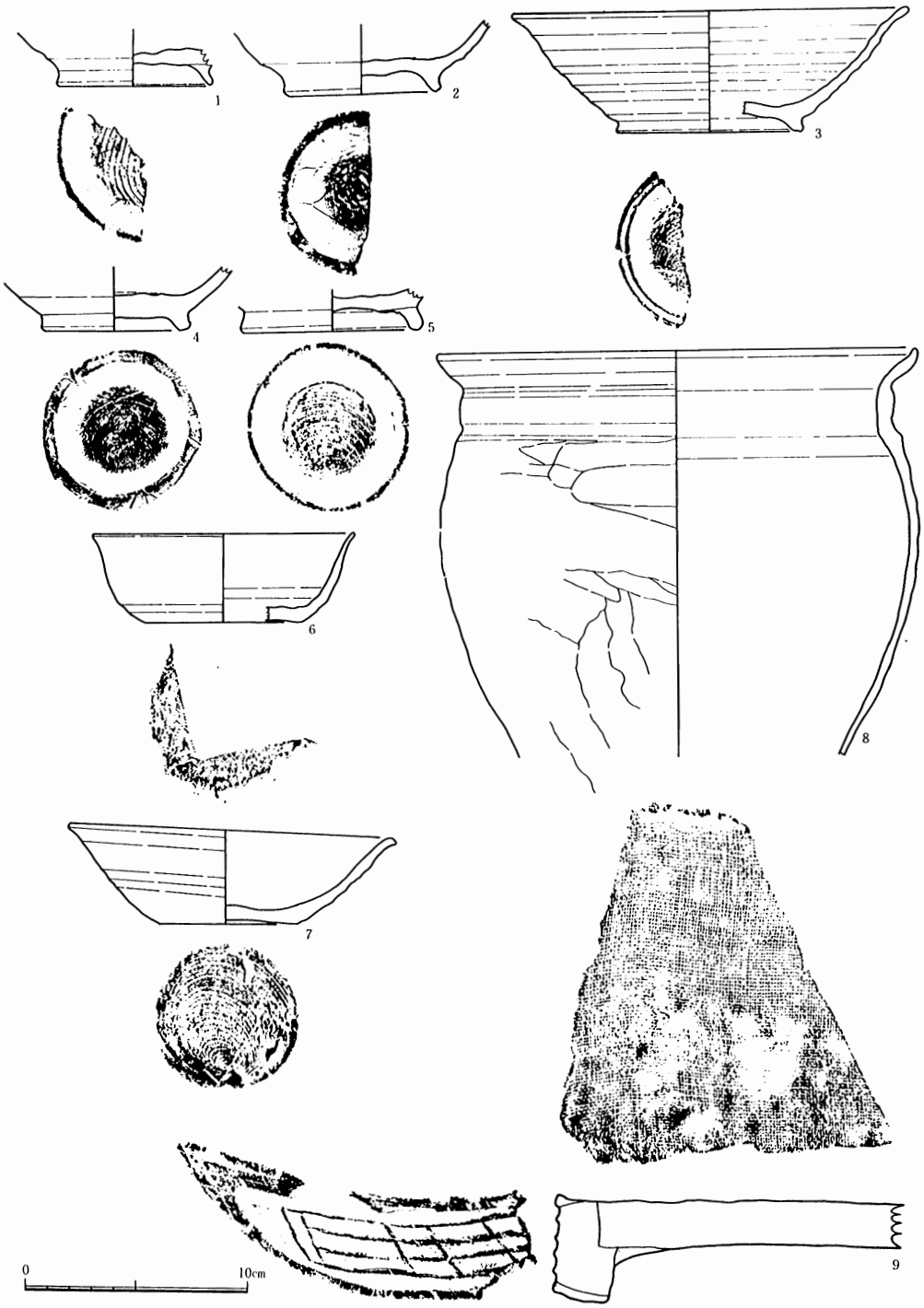
カマドは東壁中央部に設置されており、上部は2号溝により削平されている。袖は検出されていない。煙道部は壁外に掘り込まれており、長さ40cmの半円形を呈する。立ち上がりは下部を残すのみで、不明である。カマド前面には深さ5cm程度の浅い楕円形を呈す土坑が存在している。

遺物は覆土中およびカマド、土坑内より多量に出土している。1・2・4・6・7・9は覆土中より出土している。これらの遺物は床面より10cm程度の高さに集中していた。9は住居址中央部の床面より5cm程度高い覆土中より出土している。3は土坑 P_2 より出土しており、一部が住居址覆土より出土している。5は土坑 P_2 より出土している。8は大部分の破片がカマド内に集中していたが、一部が住居址覆土より出土した。

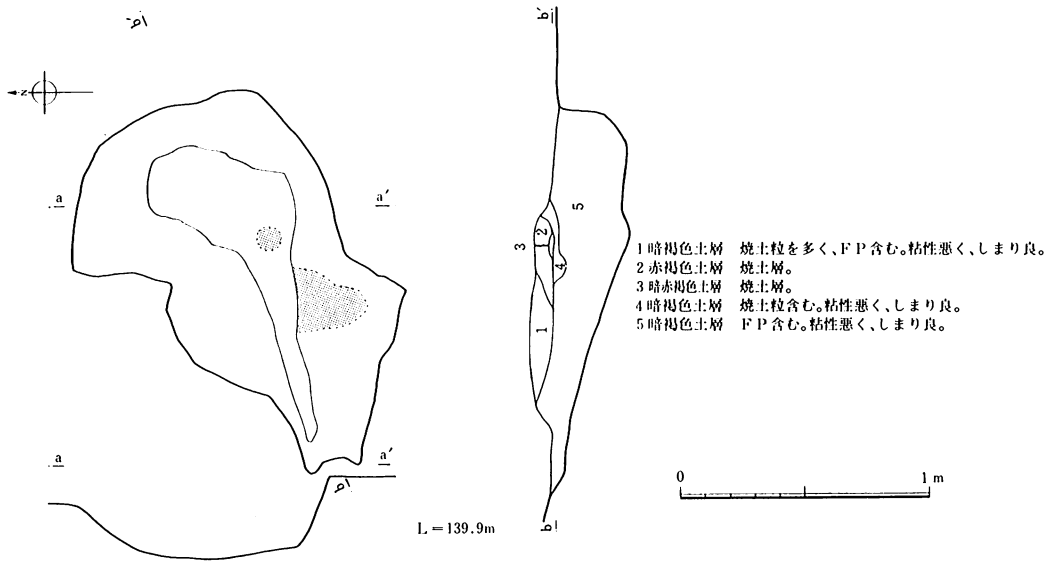
表13　　10号住居址出土遺物（第34図、図版19）

(単位cm)

番号	器　種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土
1	須恵器 椀	—— —— 6.9	高台を有す。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①灰白色②環元③底部④礫多し
2	須恵器 椀	—— —— 6.6	高台を有す。	底部回転糸切り未調整。回転ロクロ整形。	回転ロクロ整形。	①外面灰白色内面灰色②環元③底部④粗
3	須恵器 椀	17.2 5.4 8.0	外反する口縁部。	底部回転糸切り未調整。回転ロクロ整形。	回転ロクロ整形。	①灰白色②環元③¼④密
4	須恵器 椀	—— —— 6.4	高台を有す。	底部回転糸切り未調整。回転ロクロ整形。	回転ロクロ整形。	①灰白色②環元③底部④密
5	椀	—— —— 7.4	高台を有す。	底部回転糸切り未調整。右回転ロクロ整形。	右回転ロクロ整形。	①褐色②酸化③底部④密
6	須恵器 坏	11.6 4.0 6.8	若干外反する口縁部。	底部不明。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①灰色②環元③¼⑤自然釉付着
7	須恵器 坏	14.4 4.5 6.2	外反する口縁部。	底部回転糸切り未調整。ロクロ整形。	ロクロ整形。	①赤褐色②酸化③½④密
8	土師器 甕	20.8 —— ——	コの字口縁。内湾する口唇部。	口縁部横撫後、胴上部横位の削り、下部縦位の削り。	口縁部横撫で。胴部撫で。	①赤褐色②酸化③¼④礫多し
9	瓦	瓦当は格子状の文様がみられる。表面は細かい。				①灰色②環元③¼④密



第34図　10号住居址出土遺物実測図・拓図



第35図　11号住居址実測図

11号住居址（第35図、図版13－２）

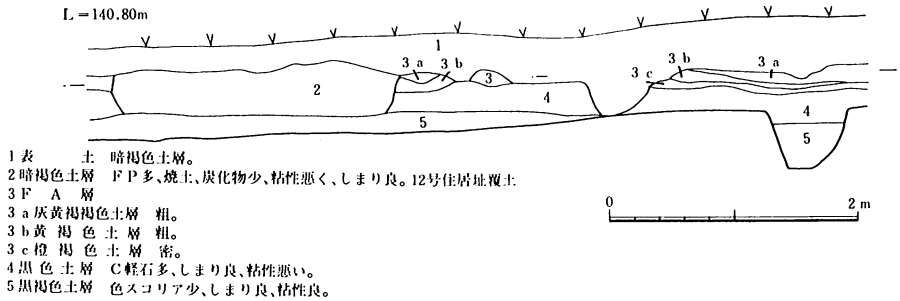
本住居址は調査区西部のａ－３区に位置し、西へ約１ｍに３号住居址が存在する。確認面は標準土層第Ⅳ層で、すでに削平を受けておりカマドを残すのみである。カマドの保存状況はかなり悪く、形態は不明である。

遺物は覆土より土師器の小片が数点出土している。

12号住居址（第36図、図版14－１）

本住居址は調査区北端に位置し、住居址北部が未調査区に延びており、南部は削平を受けて存在していない。そのため、セクションによる確認にとどまった。壁は高さ35cmで直立して立ち上がり、床は標準土層第Ⅳ層とする。

遺物は出土していない。



第36図　12号住居址断面図

第3節　土　坑

1号土坑（第13図、図版5－1）

本土坑は調査区北部のa－2区に位置し、4号新住居址の覆土を切り、構築されている。平面形は径110cmの円形を呈し、断面形は深さ15cmの皿状を成す。遺物は全く出土が見られなかった。覆土は標準土層第Ⅱ層である。

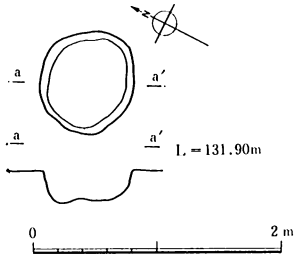
2号土坑（第20図、図版1－2）

本土坑は調査区東部のb－2区に位置し、6号古住居址の覆土を切って構築されている。平面形は長径285cm、短径105cmの楕円形を呈している。底面は深さ58cmで、西部が深く、東部がしだいに浅くなっている。遺物は少量の土師器片が出土している。

3号土坑（第37図、図版14－2）

本土坑は調査区東部のb－2区に位置する。確認面は標準土層第Ⅱ層である。平面形は径40cmの円形を呈し、深さ25cmである。覆土は単一土層で暗褐色土層である。遺物は数点の土師器小片が出土している。

第4節　溝



第37図　3号土坑実測図

1号溝（第38図、図版15－1）

本溝は調査区南部のc－1・2区に存在する。ほぼ東西に延びており、西部は攪乱により削平を受け、東部は未調査区に延びる。断面形は幅190cmのU字形を呈し、深さは東へ向うにつれて深くなっている。覆土は暗褐色土（粘性悪く、締りもやや悪い。）である。遺物は覆土中より多数出土しており、土師器・須恵器を主体とし、この他に帯滑や埴輪片が出土している。

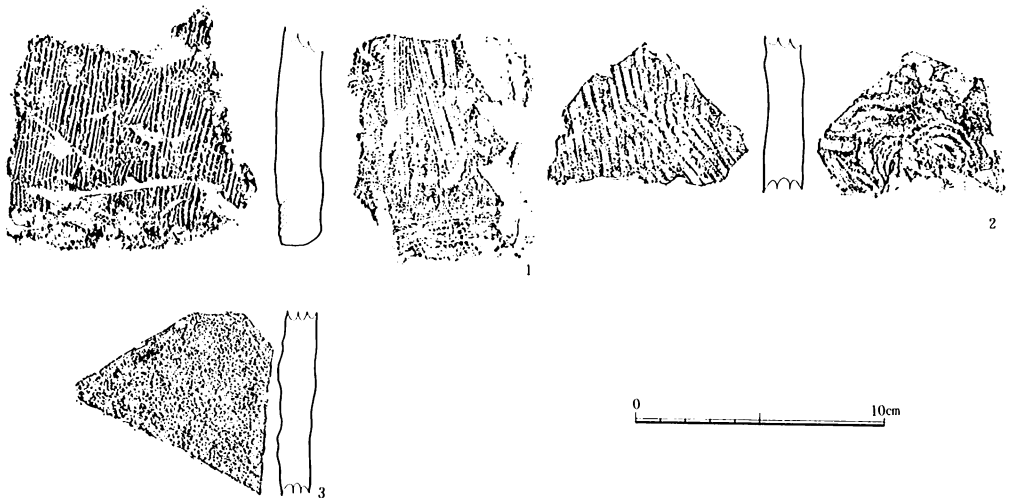
2号溝（第38図、図版15－2）

本溝は調査区西部のa・b・c－1区にまたがり存在し、その南部で1号溝と交じわる。1号と2号の関係は不明であるが、覆土中より陶磁器片が出土していることから、ほぼ同時期の所産と考えられる。幅60～120cmで、底面は平坦である。また深さ10～20cmの小ピットが乱雑に検出されている。覆土は1号溝と全く同質の暗褐色土である。遺物は少量出土している。

溝出土遺物（第39図）

1～3はいづれも1号溝出土遺物である。1は埴輪の底部片である。内外面ともに1次調整の縦ハケのみである。2は須恵器片である。外面は平行叩き目、内面は同心円当て目がある。

第38図　1・2号溝・畝状遺構実測図



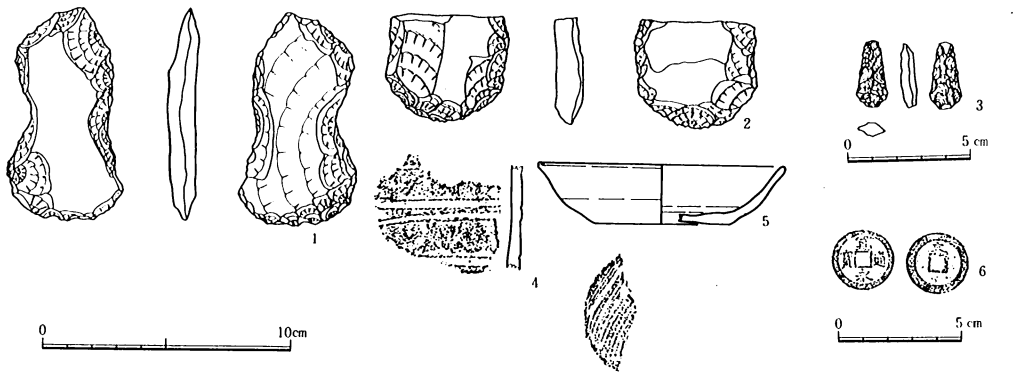
第39図　溝出土遺物実測図・拓図

第５節　畝状遺構（第38図）

調査区南部の１号溝、２号溝と７号住居址に囲まれて検出された。畝は16条存在し、幅10～30cmで、深さ５～10cmである。西端の畝覆土上面より寛永通宝（第40図６）が出土しており、近世以後と考えられる。

第６節　調査区内の遺物（第40図）

１と２は石斧である。１は８号住居址覆土出土である。中央部がややくびれる分銅形を呈する。２は１号住居址覆土出土である。刃部のみで、基部を欠損する。３は有茎石鏃である。先端部と茎部を欠損する。チャート製である。４は縄文式土器である。沈線がみられる。６は畝状遺構より出土した寛永通宝である。



第40図　調査区内出土遺物実測図・拓図

第5章　まとめ

本発掘において平安時代の集落址が検出された。これらの遺構・遺物の内、土器編年、羽釜の整形技法と形態、カマド、磨石の4点について取り上げ、若干の論考を加えてまとめに替えたい。

1．編年的位置づけ

本遺跡では遺物出土量が少ないため、独自の編年を組むことはできない。けれども、本遺跡の同一水系上に位置する清里・陣場遺跡においてほぼ同時期の集落址が調査され、報告の中で編年が論考（註1）されている。この編年と照合して本遺跡土器群を位置づけてみたい。

7・8号住居址

両住居址ともに体部が直線的に立ち上がり、底部が回転糸切り末調整の須恵器坏が出土している。また、7号住居址ではコの字口縁の甕が出土している。以上の2点より清里・陣場遺跡第1期に相当すると思われるが、8号住居址の坏は底径の大きいことよりさらに1段階古い可能性がある。

10号住居址

高台をもつ須恵器の椀の存在、須恵器坏の酸化・軟質化、土師器甕のコの字口縁の明瞭化より清里・陣場遺跡第2期と考えられる。

1・2・4号新住居址

高台をもつ須恵器椀、土師質土器の椀．羽釜の存在より清里・陣場遺跡第3期と考えられる。

5・6号住居址

各住居址ともに小形の土師質土師器、清里・陣場遺跡土師質土器椀Aが出土しており、5・6号住居址では高い高台をもつ土師質土器椀をもつことから、清里・陣場遺跡第4期に相当すると考えられる。

6号新住居址

内面黒色処理の椀および土釜が清里・陣場遺跡第32号住居址出土例に類似することより、清里、陣場遺跡第5期と考えられる。

以上が編年的位置づけがなされた住居址だが、この他の住居址は遺物出土量が少ないため不明である。また、本遺跡の土器変遷は清里、陣場遺跡にほぼ一致する。

2．羽釜の整形技法と形態

まず、本遺跡における羽釜の整形技法には大きく2類型の存在が指摘できる。両者の差はロ

クロ整形の有無により分けられる。Ⅰ類ロクロ整形後、部分的に上から下への削りを施す。Ⅱ類ロクロ未使用で、胴部に縦位の削りを施す。本遺跡においてはⅠ類が主体となっており、Ⅱ類は2点のみである。Ⅰ類とⅡ類との関係は本遺跡6号古住居址（Ⅰ類出土）が6号新住居址（Ⅱ類出土）により切られることから、Ⅱ類が新しくなる。しかし、本例のみから判断することは無理があり、また荒川正男氏によりロクロ未使用の羽釜をロクロ使用羽釜よりも古く考えられている点（註2）と矛盾する。そこで、両類の時間的関係について周辺の遺跡を含めて考えてみたい。Ⅰ類が主体的に出土した遺跡として、本桜ケ丘遺跡、清里陣場遺跡が上げられる。Ⅱ類では薮田東遺跡（註3）、大竹遺跡（註4）、中Ⅰ遺跡（註5）が上げられる。これら各遺跡の存続時期等には多少の差が存在し、各遺跡を清里・陣場遺跡の編年に照し合せてみると次のようになる。

桜ケ丘遺跡は清里・陣場遺跡第3期から第5期に当る土器群が出土しており、特に4期に伴う羽釜が主体となっている。清里・陣場遺跡では第1期から第6期まで存在するが、特に第3期から第4期に属する資料が多い。以上がⅠ類を主体とする遺跡の状況である。次にⅡ類であるが、薮田東遺跡では須恵器蓋やコの字甕が伴出する例が見られ、また高台付の須恵器埦や直線的に立ち上がる体部をもつ須恵器坏より陣場・清里遺跡第2期～第3期の様相が見られており、大竹遺跡でも同様な傾向である。ところが、中Ⅰ遺跡では羽釜の出土した住居址5軒中4軒に器高2.5cm以下の小形の土師質土器坏が出土しており、清里・陣場遺跡第6期に相当する。このようにⅡ類は羽釜出現期と終末期において認められ、さらに両者を比較すると篦削りに施文方向の差が存在する。つまり出現期の羽釜は下から上への削りが行なわれており、終末期の例は上から下への削りが行なわれている。以上をまとめるとロクロ未使用（Ⅱ類）で下から上へ削り→ロクロ使用（Ⅰ類）上から下の削り→ロクロ未使用（Ⅱ類）上から下への削りといった整形技法の流れが推考でき、桜ケ丘遺跡6号古・新住居址の重複関係も肯定することができる。

次に羽釜の口径値について検討する。桜ケ丘遺跡の羽釜口径値は最小18cmから最大22.6cmの範囲に分布し、比較的まとまりがある。他の遺跡の羽釜口径値と比較してみると、若干の相異が認められる。例えば、薮田東遺跡では最小11.2cm、最大28.3cmであるが、22点中18点が16cmから19.4cmに集中し、同様に大竹遺跡では最小14.5cm、最大22.4cmであるが、20点中18点が14.5cmから18.8cmに集中している。両遺跡の羽釜口径値はともに桜ケ丘遺跡よりも相対的に小さい傾向が認められる。これに対して、中Ⅰ遺跡では最小20.6cm、最大24cmの範囲にまとまりをもって分布し、桜ケ丘遺跡よりも相対的に大きいと言える。この口径値の差は先に整形技法で示したように中Ⅰ遺跡自体が羽釜の存在する時期でも相対的に終末期が多いこと、さらに薮田東、大竹両遺跡は羽釜出現期と思われることから、口径値法量が小から大へ変化したことが推定できる。その点から本桜ケ丘遺跡の羽釜は羽釜伴出時期でも最も発達した時期と言える。

これまで本桜ケ丘遺跡の羽釜を問題の糸口にして、整形技法と口径値の変化について触れてきた。本稿において羽釜の整形技法と口径値値の時期的な変遷のみを問題としたが、さらに形

態に関する詳細な分析を行なうことにより多くの時期的変遷を見い出される可能性を示めすことができると思われる。また、口径値の変化はその機能の問題に大きく係わると思われ、その意味について今後の課題としたい。

3．カマド

本遺跡から検出された住居址のカマドは構築材と煙道部形態により大きく3類型できる。構築材は砂質凝灰岩を利用する場合と河原石を利用する場合がある。前者は7号住居址1軒で、後者は1・5号住居址の2軒に認められ、この他の住居址は不明である。砂質凝灰岩は本遺跡西方にある鳥羽遺跡に採掘跡（註6）が多数存在しており、本遺跡の例もその付近より運ばれてきたものと思われる。そこで本遺跡は採掘跡に近いにもかかわらず河原石を構築材として利用していることが問題となる。この点に関して、本遺跡7号住居址が9世紀代の構築であり、1・5号住居址が10世紀代の構築であることより時期な差が想定できる。

次に煙道部の形態について触れる。本遺跡では平面形がU字形の例とV字形の例の2形態が存在する。V字形の煙道をもつカマドは5号住居址、6号古・新住居址で、出土土器から見ると清里・陣場遺跡の第4～5期に相当し、本遺跡でも新しい時期となる。つまり、煙道部はU字形平面が古く、V字形平面が新しいことが想定できる。

本遺跡におけるカマドの変遷は砂質凝灰岩を構築材とするカマド→河原石を構築材とし、煙道部平面がU字形を呈するカマド→河原石を構築材とし、煙道部平面がV字形を呈すカマドという変遷が考えられる。

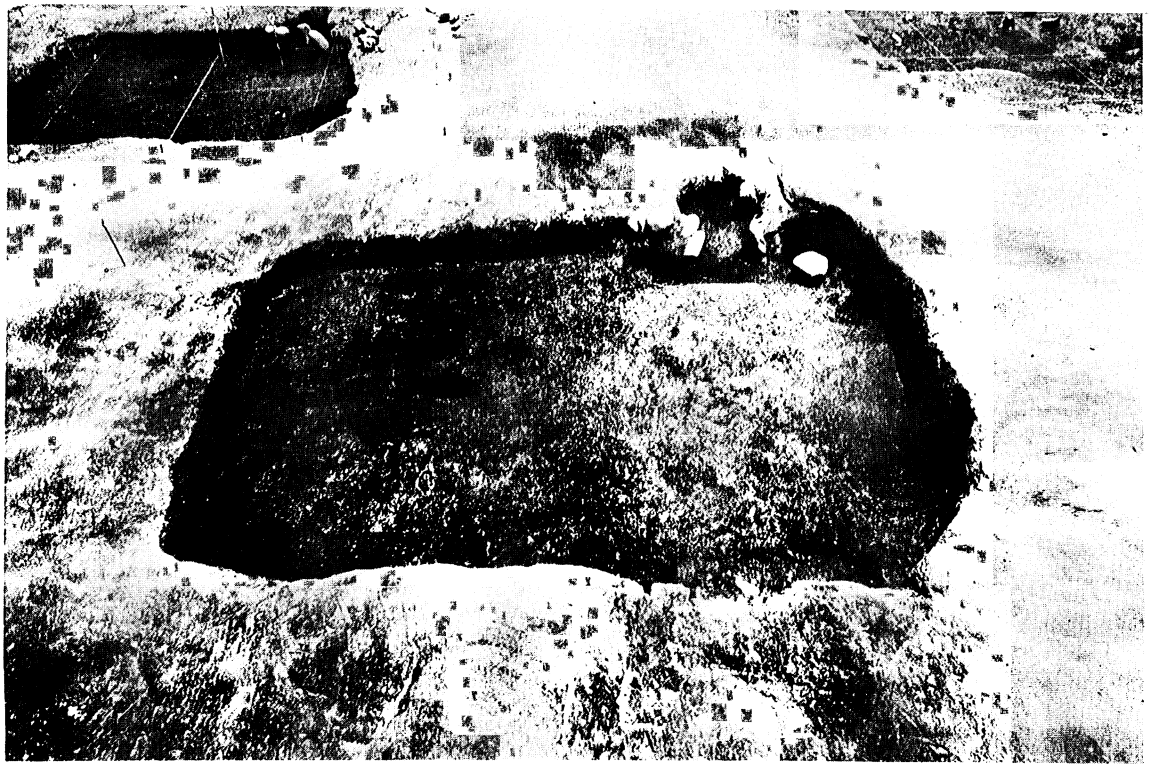
4．磨　石

本遺跡では1・7号住居址より磨石・台石、叩き石が出土した。これらの石製品はいずれも平安時代の所産である。類似する資料は荒砥島原遺跡B区1号住居址（註7）より叩き石と磨石があり、この他にも存在するようである。磨石および台石は平担な面にやや光沢を帯びた磨滅痕が認められ、両者はセットとして利用されたと思われる。叩き石は先端に著しい打痕があり、ややかたいものを叩き割ったような痕跡である。これらの製品の機能は不明である。しかし、本遺跡の1号住ではカマドのすぐ脇の床面より台石が出土しており、この点から食品加工の道具としての可能性が指摘できる。仮に食品加工に係わるとみる場合、叩き石、磨石、台石は生粉加工用具としての機能が推定できる。また、本遺跡周辺の地形は水田に不向きな台地部分が多く、畑作が発達していたと思われ、畑作の場合には陸稲あるいは麦作など考えられる。麦は近年まで関東北部において広く耕作されており、うどん等の粉食製品に加工されていた。粉食の歴史がどの程度の古さまで遡れるかが興味ある問題である。

1．清里・陣場遺跡　　1981年　　群馬県埋蔵文化財調査事業団
2．大久保山Ⅰ　「第２章第２節羽釜について」1980年荒川正男
3．薮田東遺跡　　1982年　　群馬県埋蔵文化財調査事業団
4．関越自動車道（新潟線）月夜野埋蔵文化財発掘調査報告書「10．大竹遺跡」1985年
月夜野町遺跡調査会
5．森・中Ⅰ・中Ⅱ遺跡　1983年　　群馬県埋蔵文化財調査事業団
6．年報２　「鳥羽遺跡」　　1983年　　群馬県埋蔵文化財調査事業団
7．荒砥島原遺跡　　1983年　　群馬県埋蔵文化財調査事業団

写 真 図 版

1．発掘終了状況



2．1号住居址完掘状況

図版 2

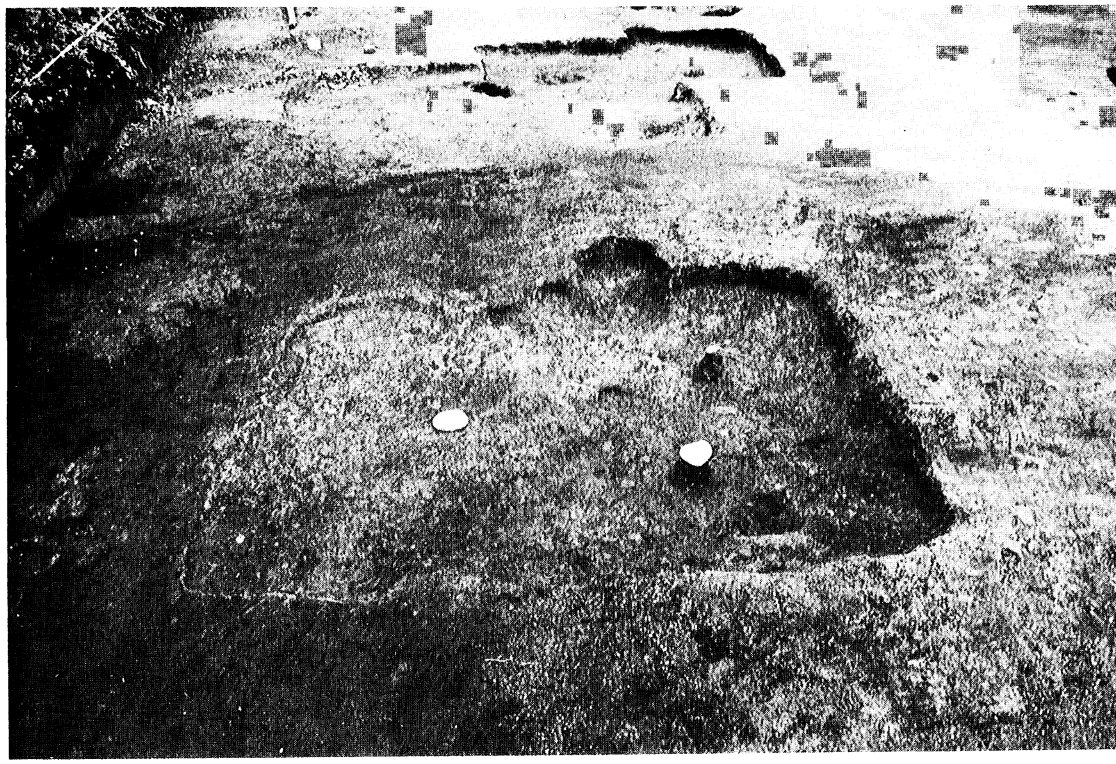
1．1号住居址カマド遺物出土状況

2．1号住居址カマド完掘状況

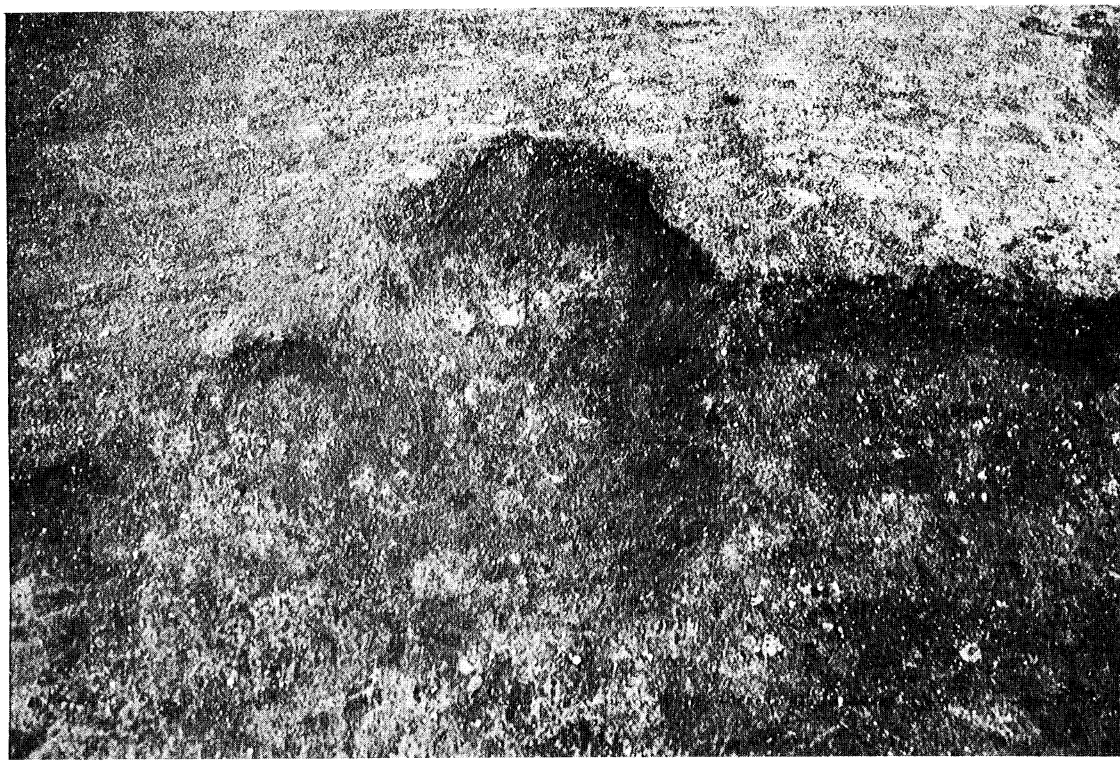
1．２号住居址完掘状況

2．２号住居址カマド

図版 4



1．3号住居址完掘状況



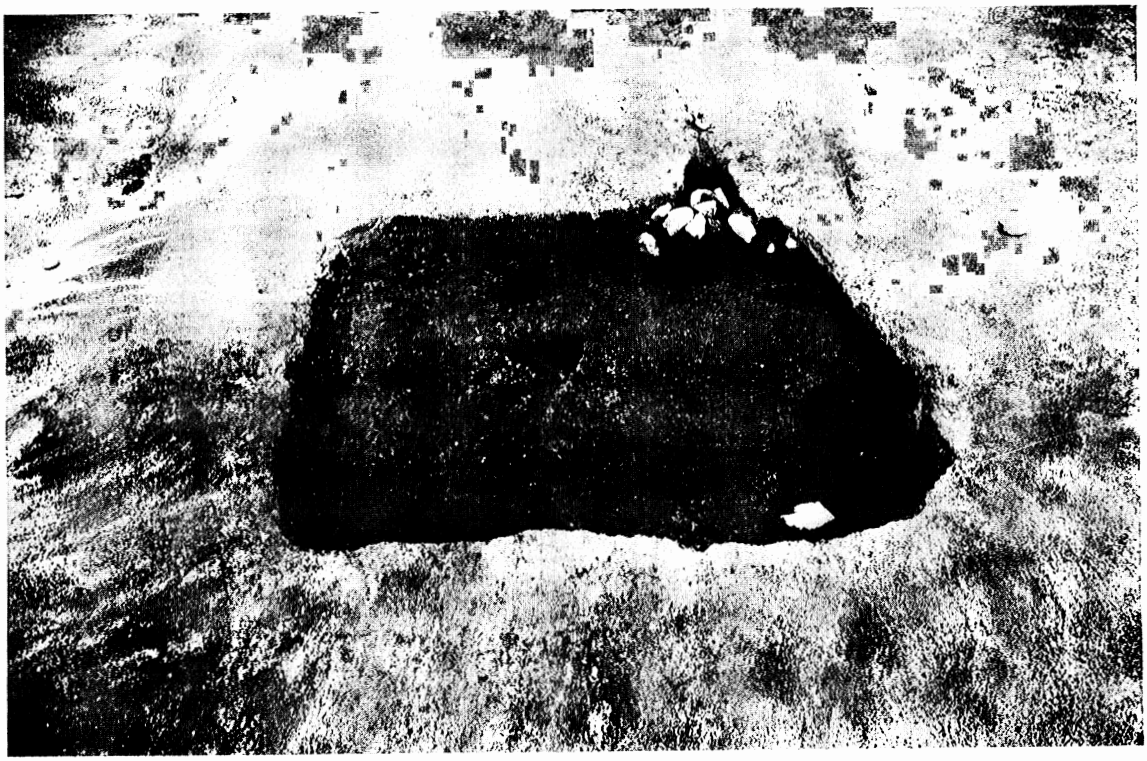
2．3号住居址カマド

1．4号新住居址完掘状況

2．4号古住居址完掘状況

図版 6

1．4号古住居址カマド完掘状況

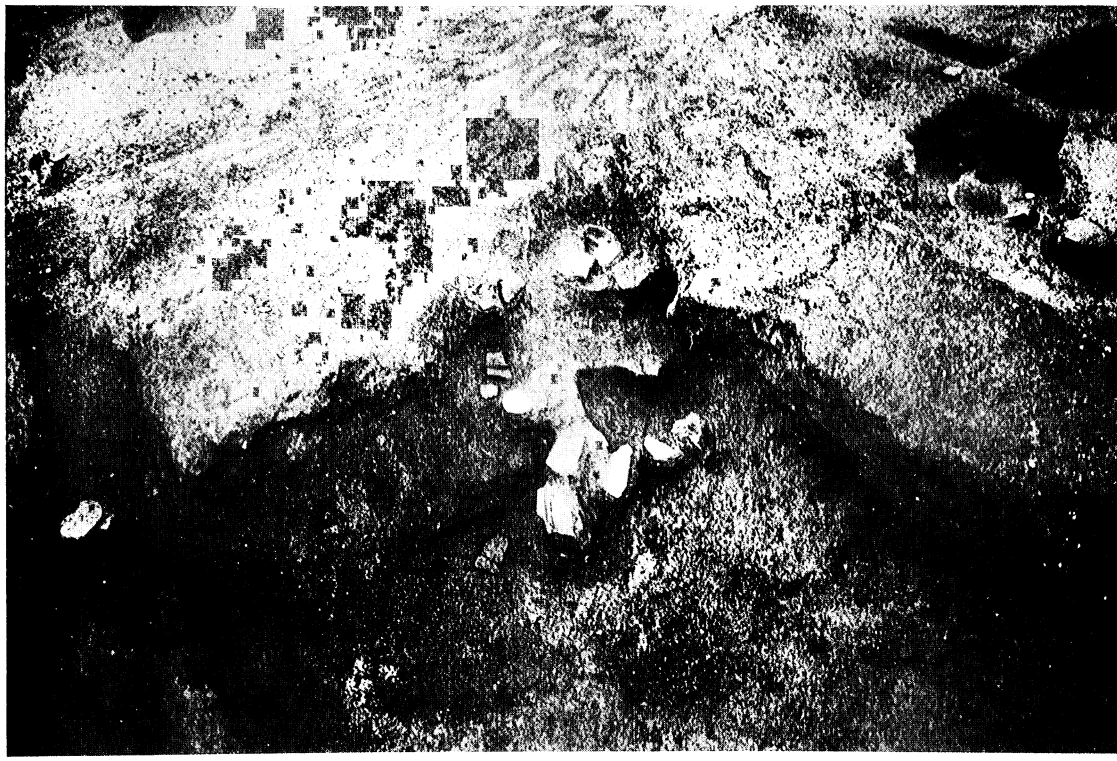


2．5号住居址完掘状況

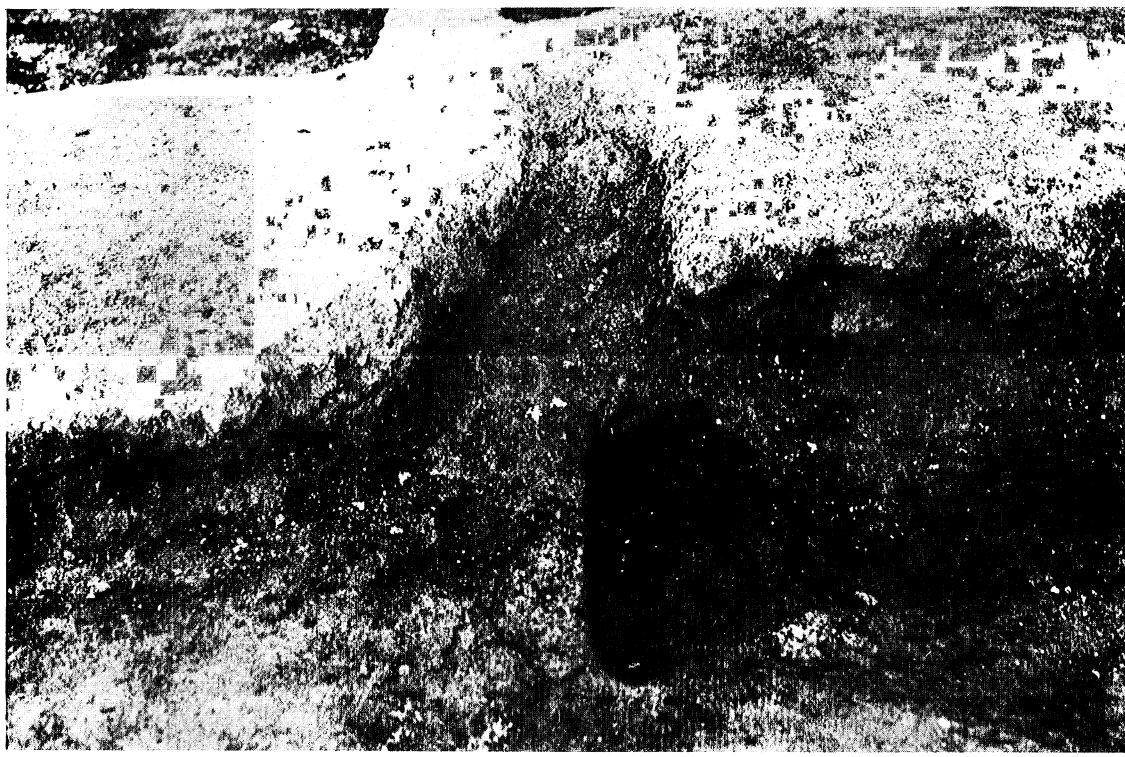
1．5号住居址カマド

2．6号新住居址完掘状況

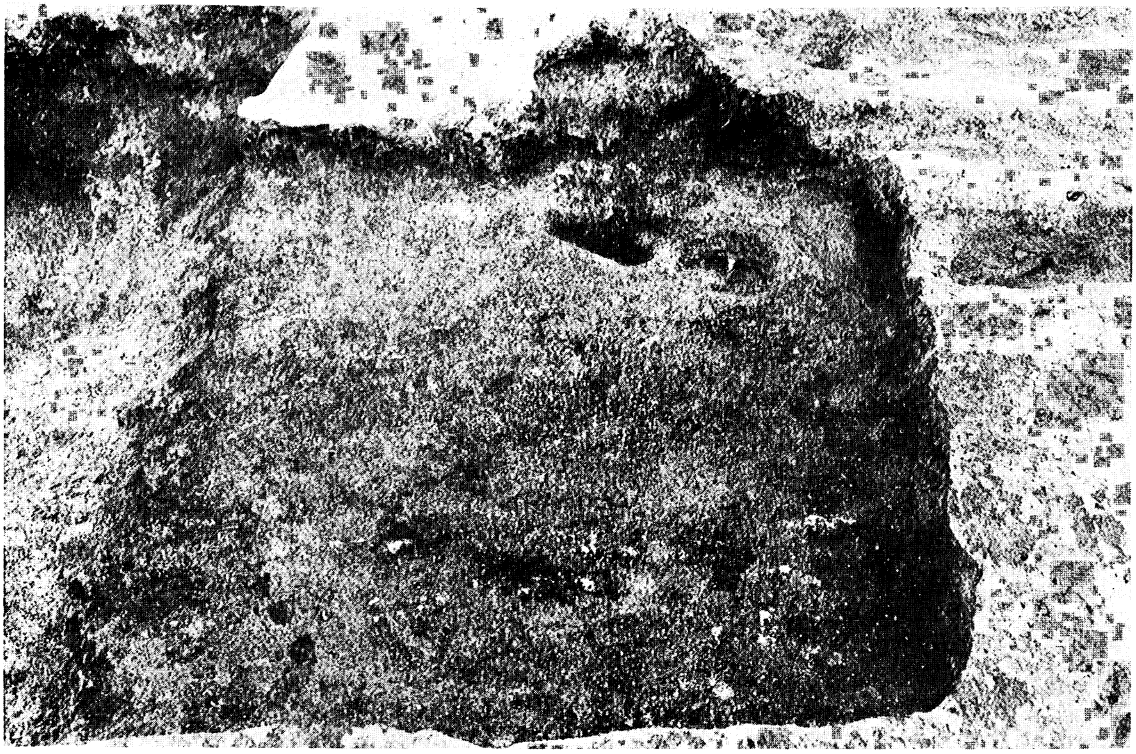
図版 8



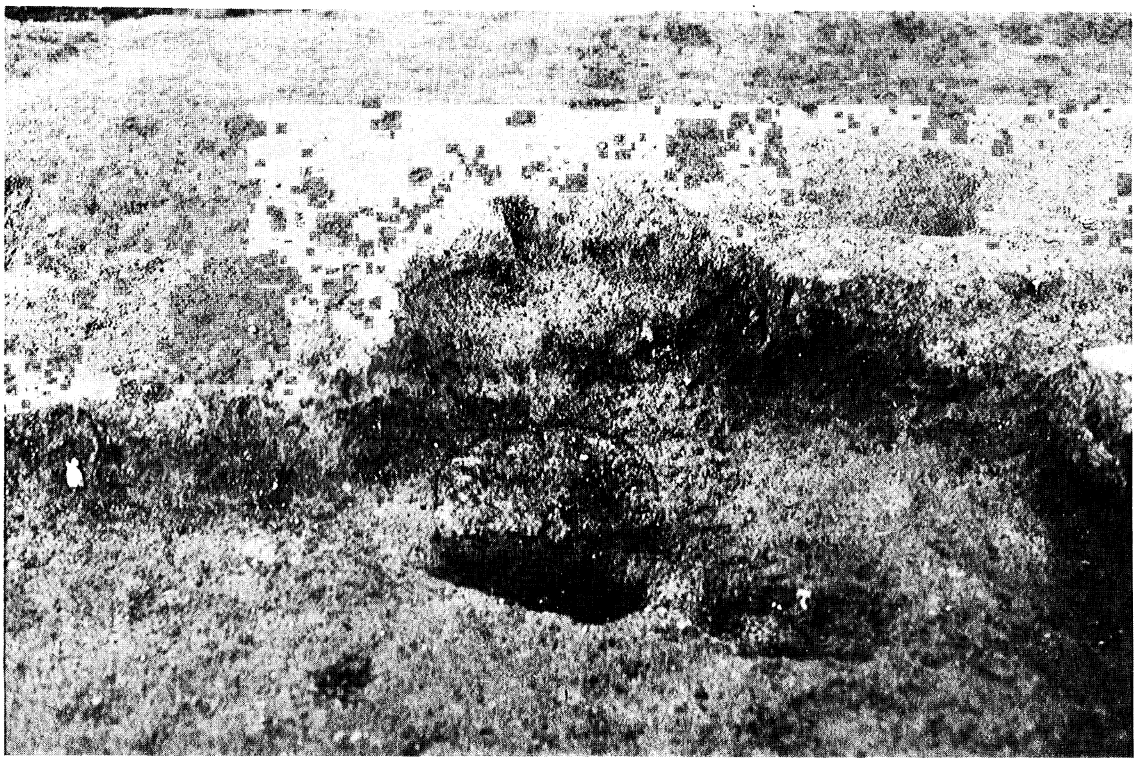
1．6号新住居址新カマド



2．6号新住居址古カマド

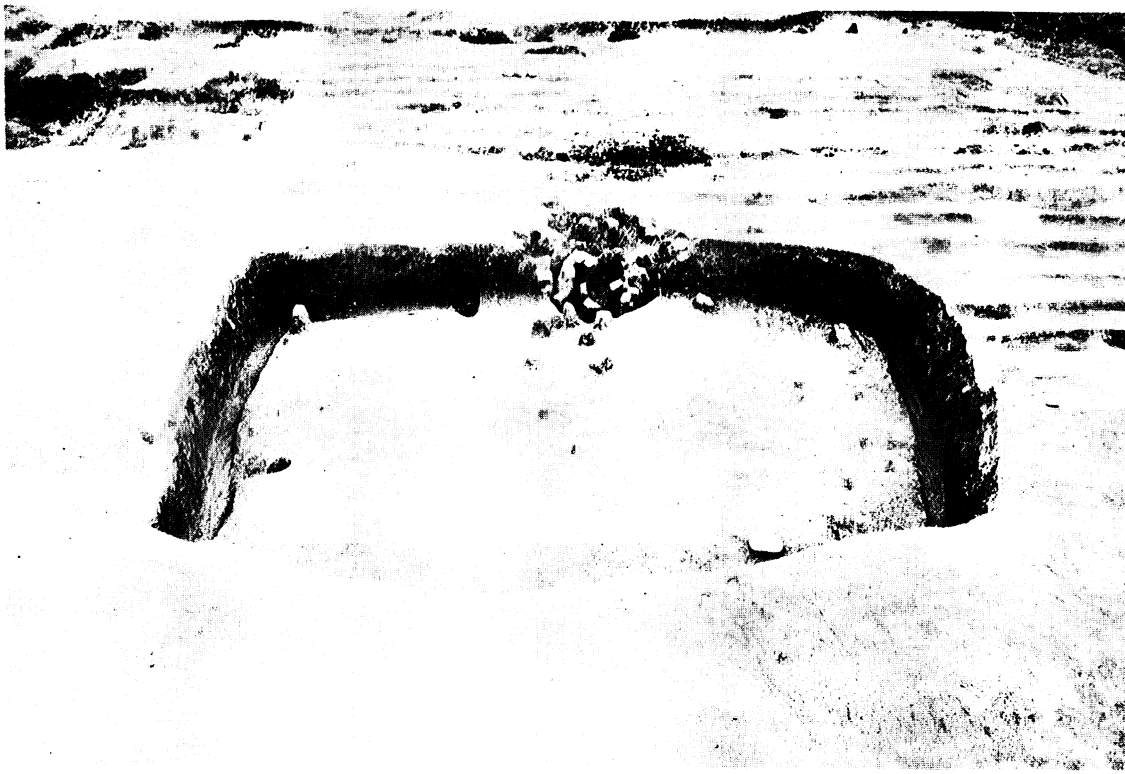


1．6号古住居址完掘状況



2．6号古住居址カマド完掘状況

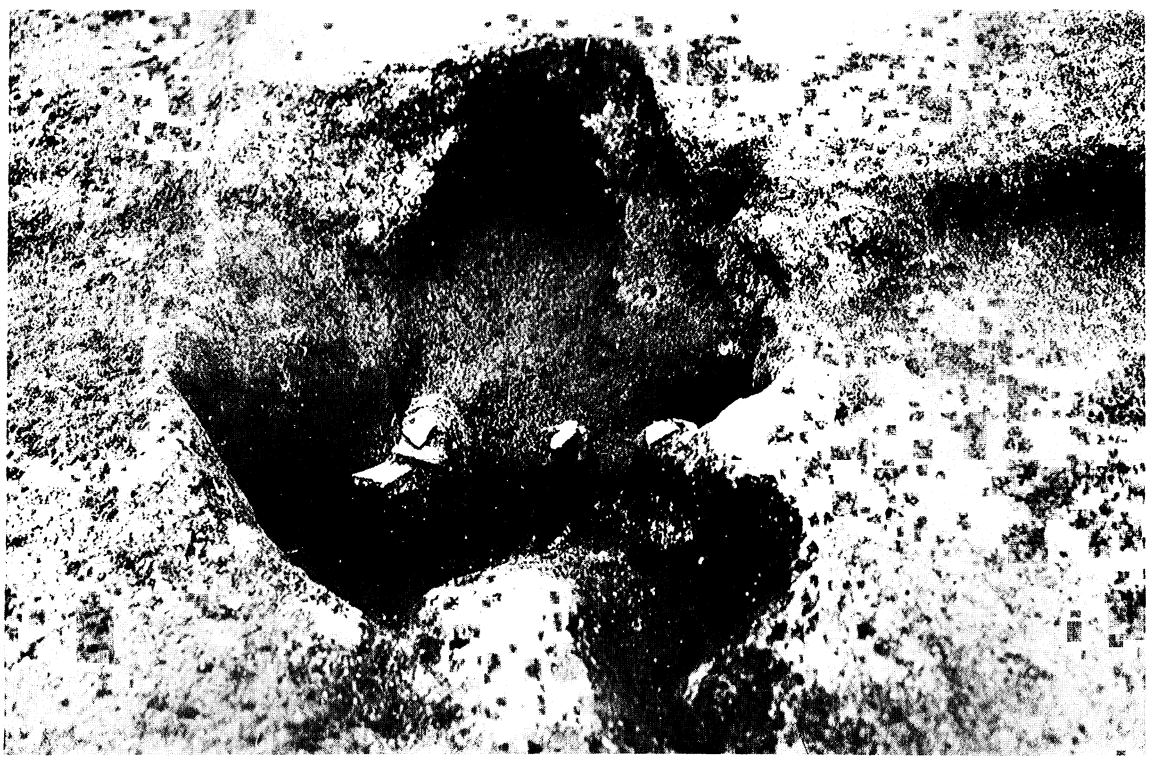
図版10



1．７号住居址完掘状況

2．７号住居址カマド

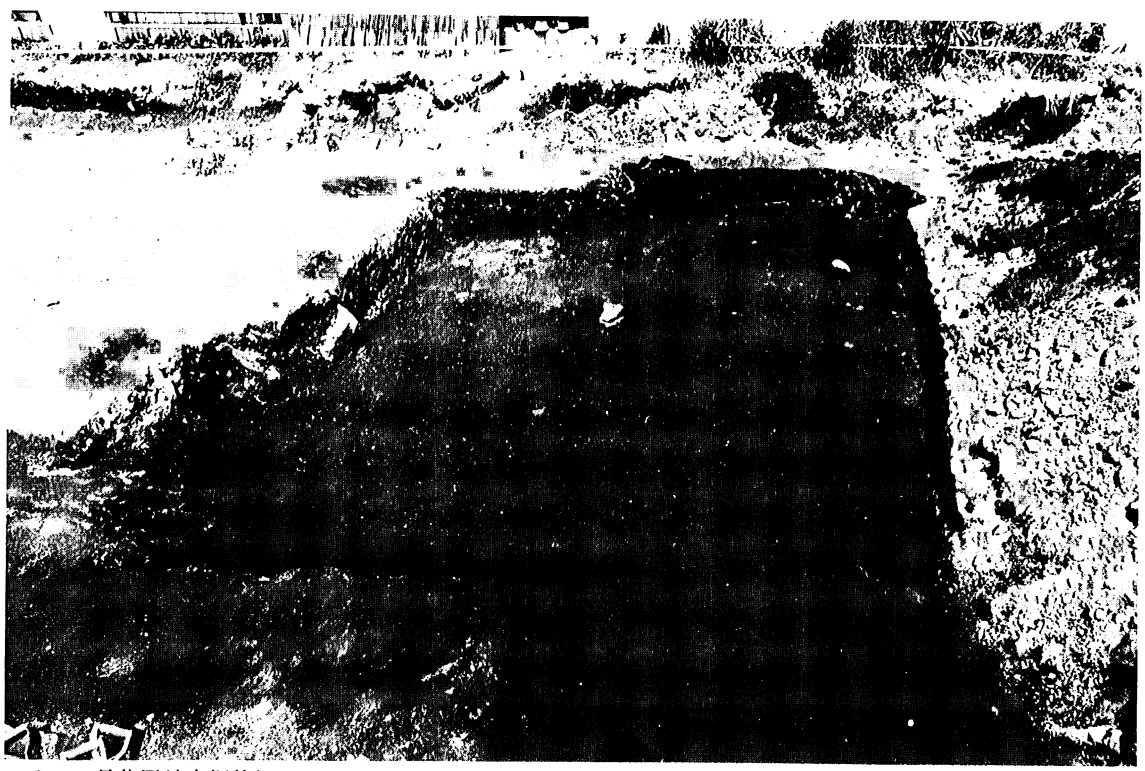
1．８号住居址完掘状況



2．８号住居址カマド

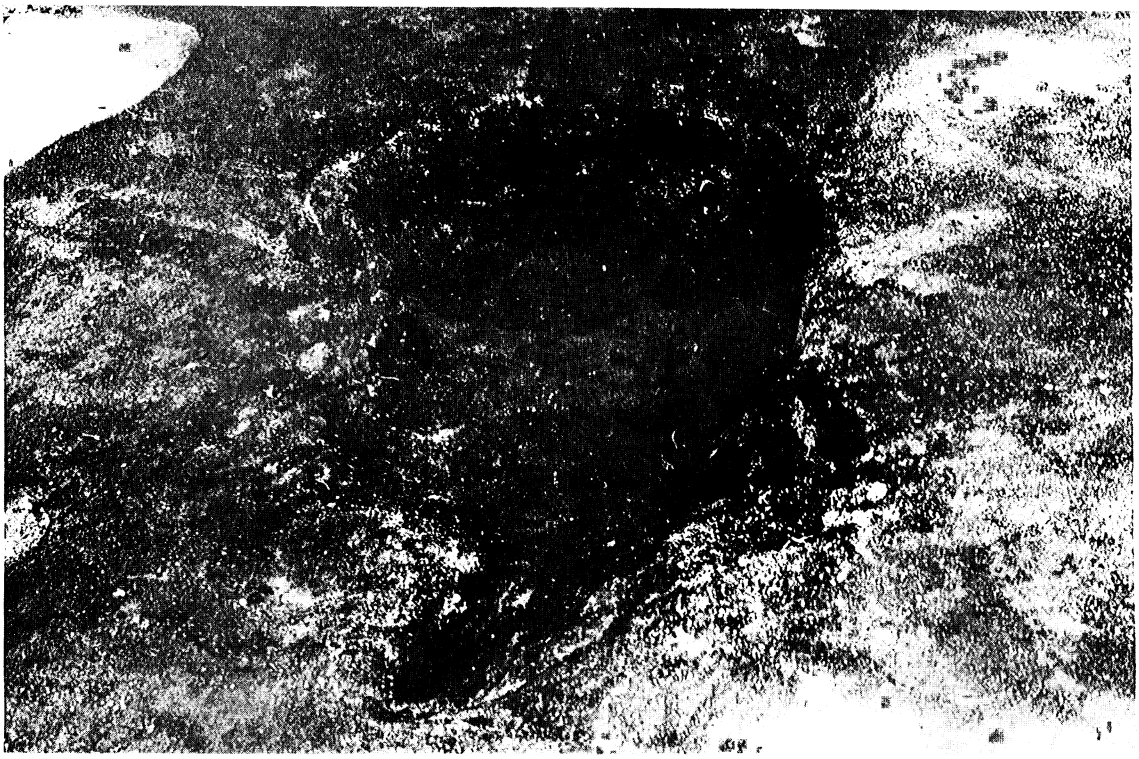
図版12

1．9号住居址完掘状況



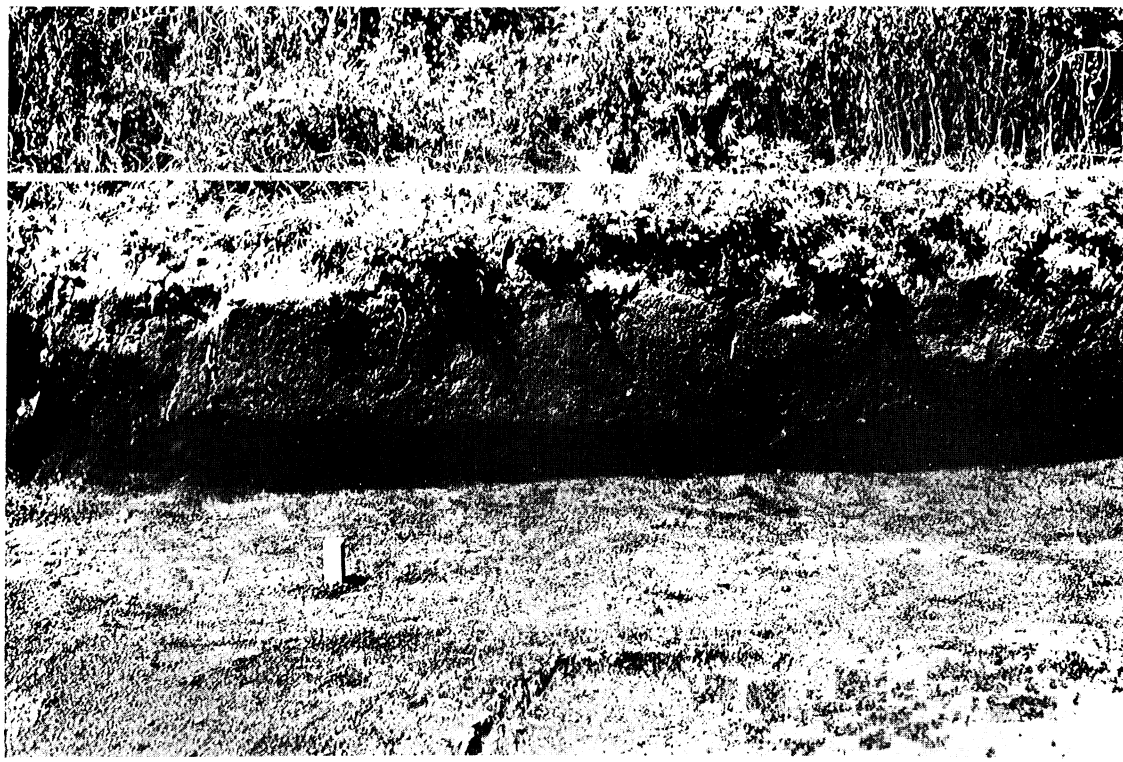
2．10号住居址完掘状況

1．10号住居址カマド完掘状況

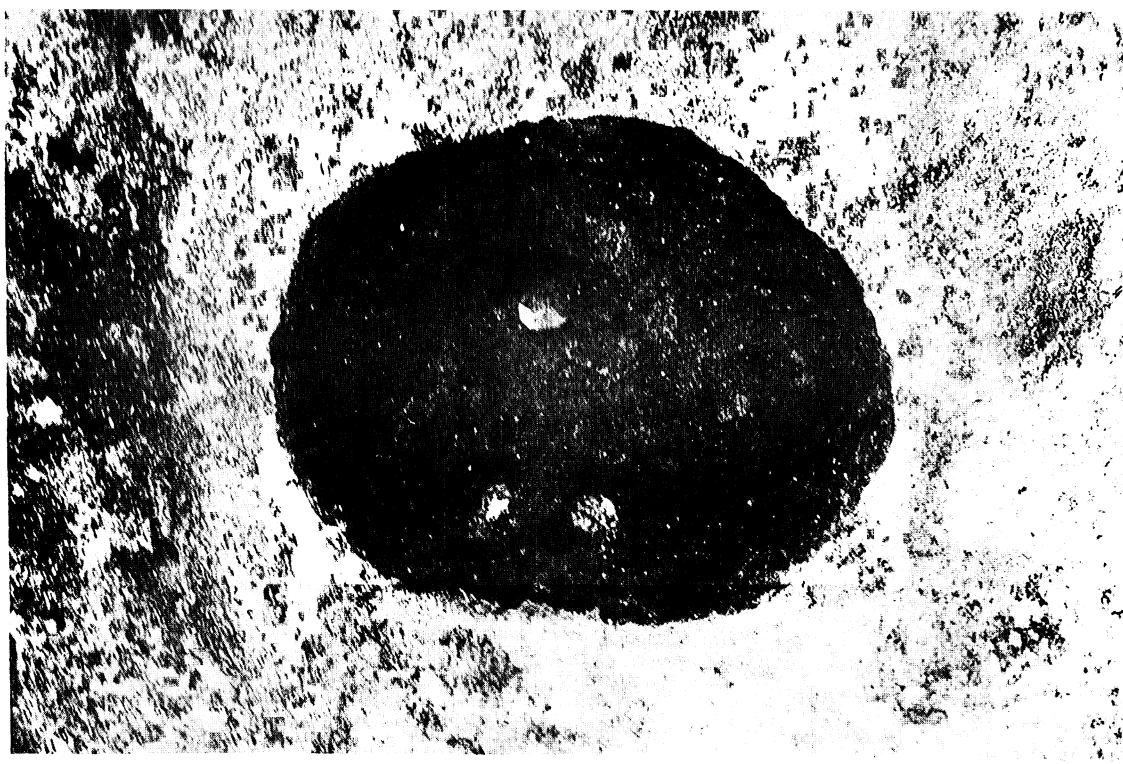


2．11号住居址

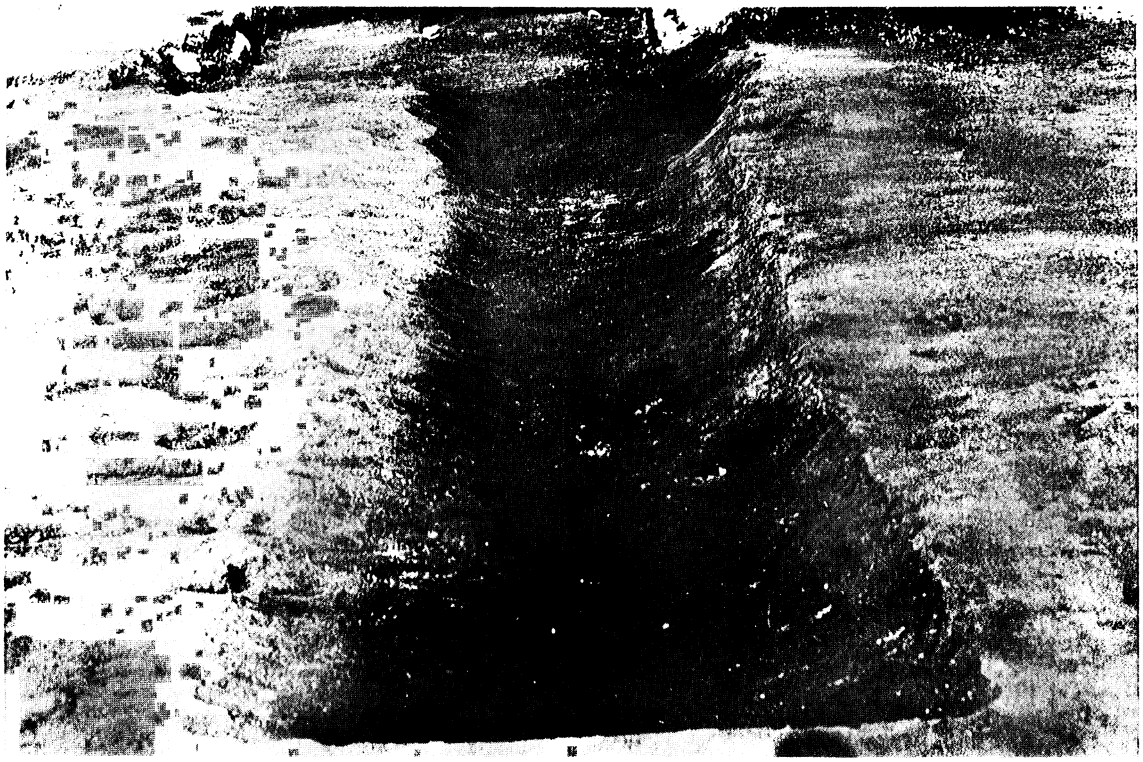
図版14



1．12号住居址



2．3号土坑

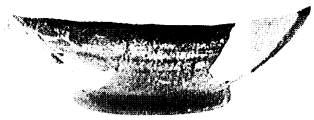


1．1号溝

2．2号溝

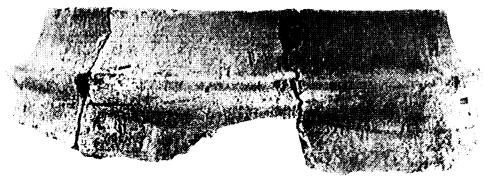
図版16

1号住－2

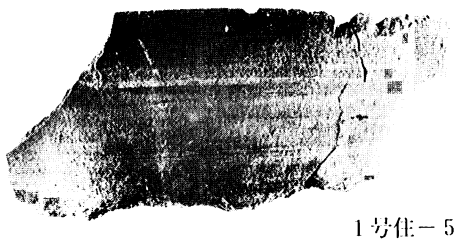


1号住－3

1号住－4



1号住－7

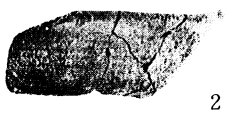


1号住－5

1号住－9

2号住－1

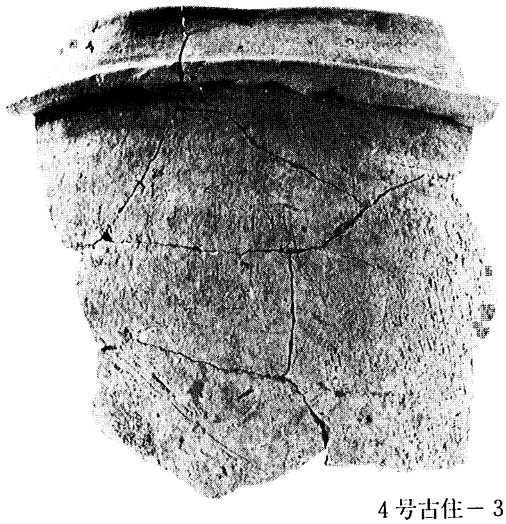
2号住－4



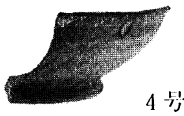
2号住－2

1・2号住居址土器

4号新住－2

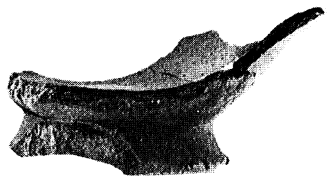


4号古住－3

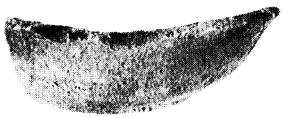


4号古住－1

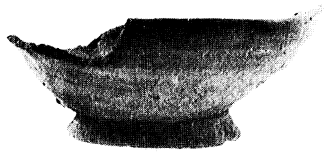
5号住－1



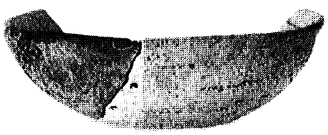
5号住－5



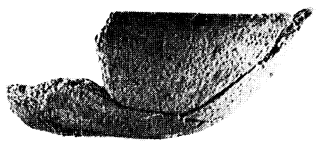
5号住－3



5号住－6



5号住－4



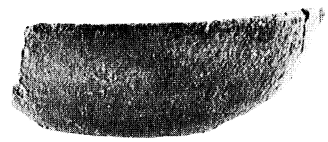
6号新住－3

6号新住－2

4号新・古住居址、5号住居址、6号新住居址土器

図版18

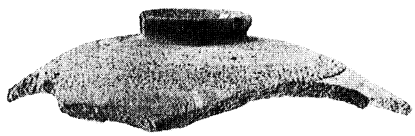
6号古住－2



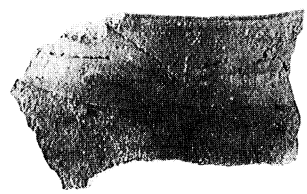
6号古住－4

6号古住－9

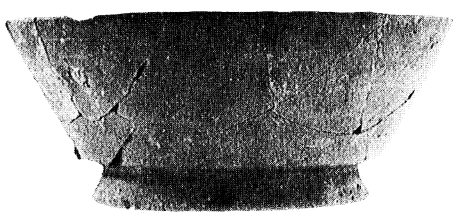
6号古住－8



7号住－4



7号住－5



7号住－3

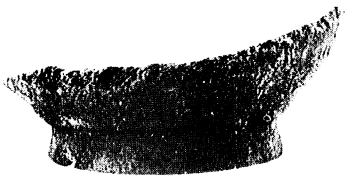
6号古住居址、7号住居址土器

9号住－1

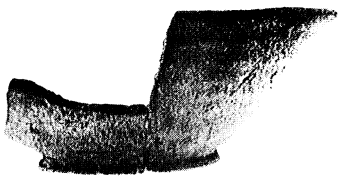
10号住－1

10号住－6

10号住－7



10号住－4

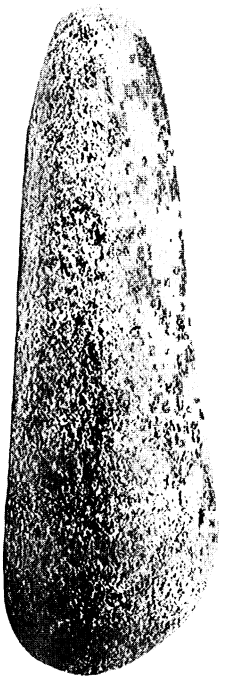


10号住－3

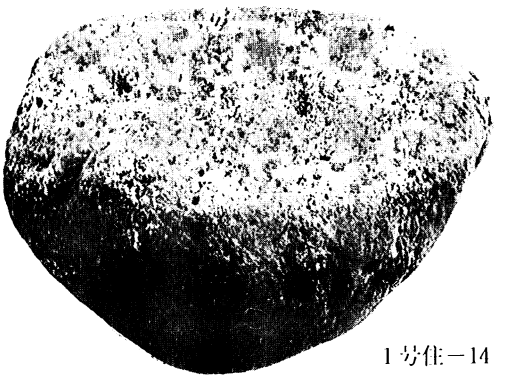
10号住－9

9・10号住居址土器

図版20



1号住－15



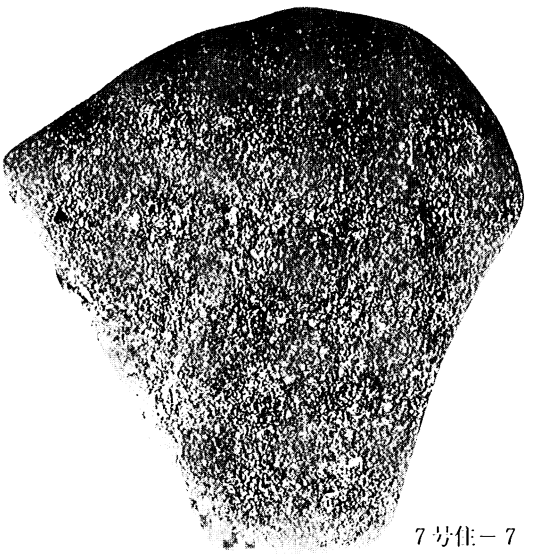
1号住－14

1号住－11

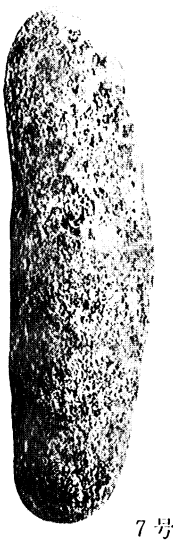
2号住－5

2号住－6

1号住－10



7号住－7



7号住－8

石製品・鉄器

総社桜ケ丘遺跡
昭和60年４月１日　印刷
昭和60年４月１日　発行
編集　山武考古学研究所
発行　前橋市教育委員会
印刷　文化総合企画